
行灯の昼

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行灯の昼

【Nコード】

N2394Y

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

株式会社エア・トラッド・ジャパン、よつつめのお話です。地味で口下手、見た目も凡庸。万事につけて目立たない男の一人称のお話。フツの人たちがフツの生活の中で、ゆったりと心を通わせる話になると、いいなあ。

*R-15は保険なので、そんなシーンが出てくるかどうか、まだ未定。

「長谷部君、肩揉んでえ」

デスクの上に腕を投げ出す水元佑子、三十四歳経理部総合職。

彼女は二十七歳で一度姓が変わり、二十九歳の時に元の姓に戻った。バツイチ子ナシ、そして俺の同期だ。

俺が社内で唯一、気安く口を利く女でもある。

三十四にもなって、女と喋るのに緊張するのは、俺が慣れていないせいだ。

俺は口下手だ。ツラも女ウケしない。

二年後輩の山口みたいに、ツラも良ければ弁も立ち、上司の覚えがめでたいヤツと違うのだ。

「なんで、水元の肩を揉まなきゃなんないの？」

「長谷部君の芋虫みたいな指が、気持ちいいの」

芋虫ねえ……確かに、俺の指は太い。

「新しい派遣の子が、なかなか使えなくってえ。坂本さん、よく働いたんだけどなあ」

「ああ、なんだかパニック起こしてたって子」

水元の首から肩にかけて、揉み解してやる。

「いててっ！もつと柔らかく揉んでよう」

「力なんか入れてないぞ。血行悪いな、ババアみてえ」

「花の独身よ、私」

「まったく……祝儀、返せ」

「ああ、その節は有難う存じました。もう使っちゃったよーん」

残業の薄暗くなった社内で、経理部にも水元しか残ってない。

俺の所属する設備施工部も、もう空だ。

「およ。ラブシーンかと思ったら、長谷部さんと水元さんかあ」

開発営業部のお調子者、萩原がパーティーシヨンの隙間から顔を出した。

「あら、長谷部君と愛の語らいの最中よ。邪魔しないで」
水元が軽やかに返すのを、羨ましく聞いていた。

「長谷部さんが愛の語らいつすか。誠意ありそうっすねえ」
ほらね、俺の評価なんて、そんなもんだ。

今は山口の嫁さんになってしまっている野口さん。

彼女は入社当時、立てば芍薬とはいかなくても、タンポポよりはずいぶん美しかった。

俺より一年後に入ってきた彼女に、ずいぶんときめいたこともあった。

彼女の頭の回転の速さとか、華やかな雰囲気、気圧されて、誘うこともできなかつたけど。

あれだけ仕事ができるのに、短大卒だっただけで一般職でサポート業務しかさせない、会社のシステムってなんだかヘンだ。

俺がそう言っただけで何にも変わらないから、誰にも言わないけどね。

いつの間にか「若手の飲み会」に誘われなくなった俺は、先日一度だけ、山口と水元に誘われて、酒の席に顔を出した。

「長谷部さんが来るなんて、珍しい」

そう言っただけで歓迎してくれた後輩たちは、時間が過ぎるにしたがつて、俺の入っていけないノリの話題に移り、お開きになる頃には、気を遣った水元さんが隣に座っているだけだった。

仕方ない。喋るのは苦手だし、今風の話題にもついていけないんだから、後輩たちが悪いわけじゃない。

気を遣わせたくないから、やっぱり「若手の飲み会」は、誘われてもパスしようと思うだけだ。

「長谷部さん。設備施工部、今忙しいですか」

「また小商いの工事とか言わないよね？」

萩原の俺への問いに、隣の席が、即答する。

俺の所属する部署は、基本的にビル物件の空調設備の設計施工を行うので、店舗や住宅は扱わない。

「物件のエリアがダブってて、エリア外の工事店にやらせると、後でメンテ契約の時、揉める惧れが……」

その物件に関しては、開発営業部の津田から、先手回しのメールをもらっていた。

「そこを揉めないようにするのが、営業の手腕だろ」

「それが難しい工事店だから、頭下げに来たんですよ」

「山口に相談しろよ。得意だったろ、煙に巻くの」

「他部署だし、現場から離れちゃってるし」

俺より何年か先に入社した生田さんは、とにかく仕事を増やしたくないタイプの人だ。

工事店に仕事をまわすより、元請けが直接工事した方が利益率が高いのは知っている癖に、少し手が空いていても、利益が大きい仕事だけをメインに、小商いをしたからない。

「いいよ、個人商店だろ？予算出てるのか」

気の毒な萩原を解放してやりたくて、生田さんの言葉を遮った。

多分部内で調整しても、うまい業者が探せなくて、こっちに来たのだ。

物件は今、混んでいない。予定外の工事が一日くらい入っても、俺的にはまったく問題ないタイミングだった。

「長谷部、安請け合いですんなよ。まず申請書あげてもらわないと」

「口頭で答えてから申請書なんて、よくある流れじゃないですか。萩原、とりあえず図面送って」

嬉しそうに自分のデスクに向かう萩原の後姿に、生田さんは舌打ちした。

「他部署にどうにかしてもらおうつてのが、気に食わねえんだよ。

長谷部は甘いな」

「こっちにも利益は落ちるじゃないですか。それに萩原、最近仕事にノリはじめたとこだし」

「本人の好不調で、請けたり請けなかったりすんのか、お前は」

イヤガラセのようにマウスをポンポン叩いてみせる生田さんに、とりあえず頭を下げておく。

萩原は今年に入ってから、仕事への姿勢が変わってきてるし、そういうヤツはこっちも応援したいんだけど。

「長谷部さん。萩原の無理を聞いてくれたみたいで、ありがとうございます」

一人前の中堅営業社員になった津田が、パーティションの上から顔を出した。

今でこそ萩原の指導担当だけれど、こいつもいろいろやらかしたクチだから、必ず後輩のフォローに入る。

仕事つてのは失敗してナンボだから、実はやらかしたヤツほど成長が大きい。

「津田あ。こっちの仕事増やすように指示したのは、おまえか」

生田さんが、文句言う気満々で噛み付く。

「大丈夫ですよ。俺が行きますから、生田さんには手間取らせません」

俺のとりなしがますます気に食わなかったのか、生田さんは自分のデスクの前に、どん、と座る。

「長谷部みたいなお人好しに、直接話を持ってったら、忙しくて

も請けるのわかってんだろうが。ちゃんと後輩の指導しろよ」

「いや、俺も仕事が詰まったら断りますって。大丈夫だ。行つていいよ、津田」

手を合わせる津田に合図して、場を下がらせる。

荒れ模様の生田さんの説教を聞くのは、俺だけで充分だ。

「は・せ・べ・く・ん」

給湯室でカップ麺に湯を入れていると、後ろから水元の声がした。

「今日も残業？頑張るねえ」

「いや、これ食ったら帰るけど。家に帰っても誰も居ないし、腹減ったしな」

「生田さんに、またごちゃごちゃ言われてたね」

「仕方ないね。考え方も違うし、俺はやっぱ甘いから」
水元はくすつと笑った。

「だからみんな、長谷部君を頼りにするんだよね。人が好いのは長所だよ。じゃあ、お疲れ様ー」

給湯室から洗面所に向かった水元は、化粧でも直して帰るんだろうか。

頼りにされてると甘く見られてるのは、違うぞ。

本当は生田さんに言い返したいことは、山ほどあったんだ。

「長谷部さんって、糸川さんと飲みに行ったりしてるんですか？」
經理の派遣社員の下田さんは、なんていうかイマドキちゃんで、仕事よりもプライベート優先の雰囲気を漂わせてる。

小さな可愛い顔と、明るい色に染めた髪と、短いスカートだ。

大体ろくすっぽ口を利いたことのない俺に、何故こんな風に話しかけたかって言うと、サービス部の新人の糸川が俺に懐いてるからだ、と見当がつく程度。

利害関係がわかりやすくて、素直っちゃ素直なんだな。

「たまにはね。糸川も今、忙しいから」

「どんな話するんですか？今度、連れてってくださいよお」

他の男目当てに気がつかなくて、気がいたら自分が除け者になっていたことは、何度もある。

座を取り持つほどの話術は心得てないから、俺以外で盛り上がってる話を耳にしながら、ただ同じテーブルに向かつてるだけで、結構消耗する。

好意を持ちつつある女の子に、そんなことをされると、結構へこむんだな。

だけど悟りきった傍観者になるほど、俺もまだ諦めちゃいないわけさ。

三十四にもなれば、それ相応に家庭なんか持つちゃって、子供の一人二人つてのは、俺が学生の頃抱いてたイメージなんだけど、今の自分を鑑みてみれば、それはあんまりリアルな空想じゃなかったらしい。

そりゃ、彼女がいた時代はあった。

一番最近だと五年くらい前に、やけに「結婚したら」って言葉の出

る女の子がいたな。

俺がそこまで盛り上がる前に、とつと他の男を見つけて結婚しやがったけど。

「あなたは、結論が見えてるんだか見えてないんだか、わかんない」「もつとじっくり考えようよ」って言ったときの、返事だった。

つまり、結婚が見えてれば待てるけど、これから考えるんじゃない話にならんってこと、だったらしい。

山口と野口さんが、一緒に会社を出て行く。

あんまり生活の見えないカップルだけど、これから一緒にメシ作ったり、洗濯したりすんのかな。いいなあ。

ドラマみたいな恋愛や、分不相応なロマンスは、期待したくたつてできない。

ただ俺みたいな地味な男を、気に入ってくれる子がいれば、大切にしたいと思う。

実際のところ、職場以外で女の子と話すことなんてないし、職場の女の子の眼中にも、入ってないけど。

つまり、お見合いシステムみたいなところに金を落とすか、このままジジイになっていくか、なのかも知れない。

両方とも、嬉しくはない。

「あ、長谷部さんも、メシ行きませんか？」

気楽に声をかけられたので、てっきり山口と津田だけかと思ったら、野口さんと水元が一緒だった。

同期の水元を呼び捨てなのに、年下の野口さんにだけ敬称をつけるつてのもおかしいけど、距離感が違う。

多分それが、俺の融通の利かなさの証明のようなものだ。

居酒屋に腰を据え、身体なりに大食らいの津田が（こいつの奥さんは、かなり小柄だ）せっせと料理を口に運ぶ。

山口は津田をからかって遊び、野口さんが時々それに便乗する。

水元は若干大人らしい態度で、でも場から浮き上がらずに話に加わっている。

俺は、浮き上がっていないか？

確かに話しやすい面子で、野口さんにも昔ほど緊張はしない。

「長谷部君、梅割り？」

あまり酒の飲めない水元が、世話を焼いてくれる。

ノリ良く話せないことに、卑屈になる必要はないと、わかってはいる。

俺はこのペースでしか他人と付き合えないし、生まれ持ったの外觀を挿げ替えることはできない。

今風じゃないかも知れないけど、他人の迷惑にはならないわけだし、社会生活にも不自由はない。

ただ時々ふっと、山口みたいに喋ればいいな、とか、萩原みたいに女の子と気軽に口が利ければ、とか思う。

他人を羨むのに、努力とか理屈はない。

「下田さんに飲みに誘われなかった？」

水元に話を振られ、ぼうつとした頭を会話に切り替える。

「糸川と一緒に話？」

水元は曖昧な顔をした。

「長谷部さんにふられたあって言ってたよ」

直接声をかけたのは俺でも、目当てはどう考えたって違うだろ。

「最近サービスは最近忙しいみたいだからね」

「ああ、あの子、結婚相手探すのに派遣やってる、みたいなところがあるからね」

山口が言葉を挟み、野口さんが同意する。

「仕事はちゃんとしてるんなら、問題ないんじゃない？」

津田がそう言うと、水元は箸でテーブルをとんと叩いた。

「ミスだらけなのよお」

「まだ入ってきて、二ヶ月だろ。慣れないんじゃないか？」

俺が返事をする、山口は俺の肩をぽん、と叩いた。

「長谷部さんって、やっぱり優しいよなあ。先週、大変だったんじゃない？」

新規の客先の資産状況を調べて、取引の前提として信用限度額を設定するのは、多分どの会社でも経理の仕事だと思う。

まあ2桁万円ならば、資産状況の質問状に記入してもらってお終いだし、逆に大物件を扱っているような会社は、公開している。

問題は、3桁前半の取引の見込みの場合だ。

大抵の場合は興信所に情報があるのでOKなのだが、直接の契約が子会社だったりすると、わけのわからないことになる。

そして今回の場合は、ちよつと小うるさい客だった。

発行してもらった発注書に書かれた会社名は、興信所にデータがなかった。

そこで税理士が発行した決算報告書の一部をコピーしてもらうことになるのだが、その連絡をしたのが、下田さんだ。

生田さんの物件だから、本来なら生田さんが客先に連絡するべきところだったが、面倒がって経理に丸投げしたのだ。

会社の決まりなので、御社の決算報告書をFAXしてください。

そんなものを何に使うの？

御社の資産状況によって、信用限度額を決めるんです。

契約するんだから、ちゃんと払うに決まってるでしょう。

でも、資産を確認しないと、売れない決まりになってるんです。

相手の財布見て、商売するの？

だって、赤字になってる会社は払えませんかよね。

どうも、こんなやりとりだったらしい。

資産状況を見せたくない会社つてのもどうかと思うけど、我儘な客は珍しくない。

これからビルを建てようってんで、すっかり殿様気分の客だって多

いのだ。

それ相手に「金が払える力があるかどうかの確認だ」と言ってしまうのは、あからさまにまずい。

まして「赤字になってる会社は」なんて、言語道断な話だ。

客先はもう、発注を取り消すなんて騒いでるし、こっちはこっちで、メインの担当の生田さんが経理に怒鳴り込むしで、大騒ぎになった。

「慣れない女の子だから」

ちょうど萩原の現場に出ていた俺は、ことの顛末がわからなくて、無難な言葉で生田さんの怒りを鎮めようとした。

「そうだ。お前が余計な仕事を入れたから、こっちの時間がなくなっただ」

生田さんに「詫びてこい」と押し付けられた俺と、経理の課長が雁首揃えて客先に菓子折り付で失言を詫びに行き、社長宅に無料でルームエアコンを1台進呈して、やっと話が収まったのだ。

経理の課長が会社に帰ったとき、下田さんは明るく「お疲れさまー」と言っただけ。

言葉遣いに注意してくれと諭したら、「ああいう時の対応の仕方を、教えてもらっていません」と、悪びれもしなかったと、水元が愚痴交じりに言っていた。

「専門職の派遣だから、プロの事務屋として相手に気を配るっていうのは、当然できると思ってたのよねえ」

当然のように俺に肩を揉ませながら、水元は溜息をつく。

溜息をつくのは、完全とばっちりの俺の方だとは思っただけ。

「ま、無事に物件契約まで済んだし、良かったよ」

「長谷部君は、大きいわよねえ」

いや、腹が立つことは立ってるんだけどさ。

いろいろ複合して腹を立てたから、どこから文句を言っているのか、わからないだけだ。

それが先週の顛末で、その翌日、経理の課長にこっぴどく叱られた
下田さんは、沈んだ顔で謝りに来た。

「もう済んじゃったことだから、次から気をつけてね」
そう言っ、終わりにした記憶がある。

「なんかねー、大人のホーヨーリヨクとか言ってたよー」

水元が俺の顔を見て言う。

「誰が、誰を？」

「やーだ。下田さんが長谷部君を、よ。生田さんにぎゃあぎゃあ怒られて、派遣元にまで苦情が行って、自分はまずいことをしたらしいって自覚したとこで、なんか優しい事言っただんじやないの？」

「いや、特に言っていないと思うけど」

あれが優しいと思えるんなら、ひどい誤解だ。

俺は話を長引かせたくなかっただけだし、彼女自体が派遣解除になっても、実はなんとも思わないと思う。

「長谷部さんは確かに、安心感ありますよね」

ストレートな津田は、お世辞は言えないから、外からはそう見えているのかも知れない。

「ああ、そうそう。困った時の長谷部さん頼み、とか、あるもんなあ」

山口まで合わせる。

同じ会社に困ったヤツが居れば、助けてやりたいと思うのは、俺が甘いんだろうか。

「長谷部君、愛されてるねえ」

水元が笑う。

「おっさんになりかけた男に愛されても、大して嬉しくない」

「あたし、不思議なのよねえ」

野口さんが唐突に俺に向かって言った。

「長谷部さんって、優しいし真面目だし、結婚するには良いタイプなのに、なんで独身なの？女の子の好み、うるさいの？」

顔面と頭の良い男と結婚した人に、そんなこと言われたって困る。そう言ってくれるなら、野口さんが俺に惚れてくれたら文句はなかったのに。

「派手にアピールする部分が少ないから、気付かれ難いんじゃない？」

水元はウーロン茶なので、結構冷静だ。

俺が何故結婚してないのかの分析なんて、要らないんだってば。

考えてみれば、山口も津田も社内恋愛で、こいつらこそ社外でいくらでも恋愛できそうなのに、近いところで探したもんだ。

水元の離婚した相手は、確か取引先の男だった。

梅割の梅を焼酎の中で潰してみる。

明日の休みは、多分テレビ見て、終わりだ。

「生田あ。流通管理が、与信オーバーで売上計上できないって言うぞお」

「いや、一昨日の現金入金で、出荷できる筈だけど。入金してくれてないのかなあ」

「経理が入金処理忘れてんじゃないかあ？水元さんに聞いてみるよ」
こんなやりとりの後に、名前を呼ばれるのは俺だ。

水元に内線で確認を頼んだ後、自分の仕事のためにモニタと睨めっこしていた。

しばらくしたら、パーテーションの影から、水元がひょっこり顔を出した。

「さっき連絡貰った物件、誰の？」

生田さんの物件だと教えると、ちよつと眉間に皺を寄せてから、覚悟を決めたように中に入って来る。

そして、入金処理ミスを報告し始めた。

「何やってんだよ！今日の出荷があるから、現金入金で頼んだのに！経理がいい加減な仕事して、現場に皺寄せが来るんじゃ、会社はガタガタじゃねえか！」

ここぞとばかりに言い募る生田さんに、口答えせずに頭を下げる水元は、痛々しい。

大体ベテランの水元が、そんな初歩的なミスをするわけがない……と、思ったのは、俺だけって訳でもない。

「まあまあ、水元さんにそんなに怒ったって仕方ないだろ。本人が処理したわけじゃないだろうし」

課長が割って入らなければ、生田さんの文句は延々続いたろう。

「でしょ？派遣さんが処理したんじゃないの？」

「でも、私が責任者ですから。任せないで、最終チェックすれば良かったんです」

最敬礼する水元に、生田さんがまだ嘔み付いた。

「処理した当人に連れて来いよ！派遣だからって無責任なことすんなって言ってやるから！」

「そこまでにしとけよ。水元さんが頭下げてる意味、なくなるだろ」

何度もぺこぺこ頭を下げて、水元は自分のブースに戻っていった。

間接部門は地味なのに、「間違いがなくて当然」と思われやすい。

実際、経理が間違いだらけじゃ、会社は立ち行かないけど。

俺も現場じゃあ責任者だし（っていつても、設備施工部は平均年齢が高い）、他部署の若手を指導する立場にはいるけど、派遣社員を上手に使えるかっていうと、ちょっと自信はない。

まだぶつくさ言いながら、流通がOKになった生田さんは安全帯をがちゃがちゃ言わせて出掛けて行った。

「長谷部さん。生田さん、すつごく怖かったですね」

給湯室でマグにコーヒーを入れたとき、後ろから下田さんに話しかけられた。

「あれ、私が入金先のマスタを間違えて入力したんです。水元さんに悪いことしちゃって」

ああやっぱり、と思ったのは、今まであんなミスはなかったからだ。

「長谷部さんの物件なら、自分で謝りに行こうと思ったんですけど、生田さんじゃ怖いんだもん」

水元なら怖いと思わないとでも、言っただろうか。

無言で給湯室を出ようとしたら、もう一度声を掛けられた。

「今週の飲み会、長谷部さんも参加するんですよね？」

「わかんないなあ。多分、出ないと思うけど」

「何ですかあ？忙しくても来てくださいよ。私、長谷部さんとお話したい」

調子良いこと言われたって、ずいぶん懲りてるんだってば。それが自分の交友層を薄くしてるのは、わかってるけど。

金曜日の晩、帰ろうとしたところで、サービス部の糸川から声をかけられた。

「長谷部さんも行くんですよね？一緒に行きましょうよ」

「飲み会？俺、参加って言ってないけど」

そこに女の子たちが通り掛った。

仕事が終わって遊びに出ようとする女の子たちは、やけに華やかだ。

「糸川君も長谷部さんも参加ですよえ。先に行ってまーす」

「俺、参加になってる？」

驚いて聞き返すと、下田さんがにこにこしていた。

「わかんないって言ってたから、私が保留にしました。お仕事終わったんなら、参加できますよね？」

わかんないってのは、婉曲な不参加表示のつもりだったんだけど。

「ちゃんと来てくださいね。私、長谷部さんと飲んだことないんですから」

そう言っただけで、女の子の集団の中に戻ってしまったのを、呆然と見送る。

参加になっちゃってるんなら、行かないのは幹事に申し訳ない。

糸川が待っていてくれるので、作業着から着替えることにする。

とは言っても、俺も糸川も営業みたいにスーツを着ているわけじゃなくて、オックスフォードシャツにスラックスだけど。

更衣室から出たら、今度は水元がその前を通るところだった。

「あれ？長谷部君も参加なんて、珍しいね。一緒に行くから、ちょっと待ってて」

そう言っただけで女子更衣室の中に消えて、すぐに出てきた。

「今日のオーバーサートイは、私だけかと思ってたら、ちょっと心

強くなった」

「え？あとみんな二十代？」

「そうよあ。山口夫妻ははじめから不参加だし、津田君は打ち合わせ入っちゃったし、他の所帯持ちは最初から声掛けられてないしね」

三人で並んで歩いて居酒屋に向かう。

「良かったわ。私だけが長老じゃ、ちょっと居づらいもん。一次会で引き上げるつもりだけど」

水元の言葉で、俺も二次会までは付き合わなくて良いだろ、と思ったら、少し気分が楽になった。

「ところで、今日の会費いくら？」

「参加って言ったのに知らないの？」

水元が驚いて俺の顔を見上げた。

「それどころか、どこでやるかも知らない。俺、参加なんて言っ
ねーもん」

「俺、さっき下田さんから、長谷部さんが参加って聞いたんですけど」

糸川がそう言うと、水元は少し複雑な顔をした。

「下田さんが長谷部君を、参加させたかったってことかしらね」

居酒屋の中は、既にざわめいていた。

糸川はあっさりと中央の席に呼ばれ、俺と水元がはじっこに座ろうとした時、奥から声がかかった。

「長谷部さん、こっち空いてます。たまには真ん中に来てくださいよう」

見ると一際若くて華やかな一角で、それだけで俺の居場所は皆無だ。「いや、ここで」

そう言いながら、詰めてもらって水元の横に腰を下ろす。

隣の席と形だけの乾杯をして、小皿と箸を回してもらって、近くの会話を聞く。

社内の人間だけで飲んでいるのだから、話題は社内の噂話とプライベートの話半々だ。

水元はちゃんと話についてってるし、時々後輩の大間違いを訂正したりしてる。

最近では、萩原がちよっと前まで経理に居た子とつき合ってるってのが旬の話題で、少しスキャンダラスな扱いだけど、当の萩原が口を噤んでいるので、それに尾鰭がついてたりする。

「いいんじゃない？最近、萩原は前よりも落ち着いてるし、他人のこと考えるようになったよ」

「同情につけ込まれちゃったんじゃないの？」

恋愛なんて当人にしか理解できないんだから、放っておいてやればいいのに。

水元が手洗いに立ったとき、その席に下田さんがすとんと座った。

「長谷部さん、なんでこんなにはじっこに座ってるんですか？私、長谷部さんとお話したかったのに」

上目遣いでそんなこと言われても、何を喋っていいかわからない。大体、なんで俺にそんなに近寄ってくる？

あんたの目当ては俺じゃないだろうよ。

「長谷部さんって、お休みの日とか、何してるんですか？」

「寝坊して、洗濯して、テレビ見てるかな。たまに、映画見に行ったりはするけどね」

「映画って、どんなの見るんですか？私、最近映画なんて見てないですー」

聞かれたことに返事をしているだけで、会話になんてなっていない。

「長谷部さんって、生田さんと一緒の部署で、大変ですよねえ」

「いや、あの人は仕事が好きっちりしてるし、現場で頼りになる人だよ」

下田さんは顔を顰めた。

「長谷部さんって本当に優しいんですね。私、あんな風に文句ばかり言う人、きらい」

優しいんじゃないくて、本当に生田さんは知識が豊富で、仕事は几帳面なんだって。

「長谷部さんの彼女って、幸せでしょうねえ」

「いないよ」

「えー？じゃ、私、立候補していい？」

はい？何に立候補だって？ずいぶん調子良いことを言うもんだ。

水元が戻っても、下田さんは移動せずに俺の横に居続けた。

喋るテンポが俺の二倍早いんじゃないかと思うんだけど、一生懸命にこっちに話題を振ってくるから、応えないわけにも行かない。

一言二言答えると、話題がまわりに移っていき、俺についていけないハイテンションで話が展開する。

そして勝手に盛り上がって行き、最後に戻ってきたときには、まったく別の話になっているのだ。

酒の席なんだから話題がよれるのは当然だけど、それに相槌を強制されるのは、ついていけない人間には結構苦痛だ。

どうにかこうにか笑った表情だけ作ってるけど、時々「どう思いますう？」なんて、隣の席から顔を窺われるので、全然気が抜けない。

下田さんは確かに可愛いし、下世話な話、持ち帰るかと聞かれたら、身体だけなら持ち帰りたいかも……なんてことを考えてると、余計に話題に乗り遅れ、そこを笑われたりする。

「長谷部さんって天然ボケ。おもしろーい」

何かを誤解している下田さんが隣で身体を擦ると、ミニのスカートの裾が乱れて、思わず目を逸らした。

「二次会は、カラオケでデュエットしましょうよ」

「いや、俺は二次会はパス……」

「行きましようよ。連行！」

ぐいっと引かれた腕の中ほどに、柔らかいかたまりがむにゅっと押し付けられた。

それね、オジサンには刺激強いです。

居酒屋から出て、二次会に不参加の面子と一緒に駅にとっとと向かう。

「長谷部さん、今日はずいぶん楽しそうでしたねえ」
いや別に、いつも通りだったけど。

ただ、話にはずいぶん参加していた気はする。
ちんぷんかんぷんではあったけどね。

そういう意味では、下田さんに少し感謝しなくてはならないかも知れない。

腕に当たった胸のふくよかさとは、また別問題としてね。

いつの間にか隣を歩いていた水元が、ちらつと俺の顔を見上げる。

「下田さん、ずいぶん懷いてたねえ」

「ん？ずいぶん酔っ払ってたみたいだったね。なんかテンション高い子だよなあ」

「惚れられちゃったんじゃないの？」

「俺に？まさか。ひとまわり上だぞ」

地味なパンツ姿の水元は、不思議な顔で笑っていた。

「なんで二次会に参加しなかったんですか？カラオケ、大盛り上がりだったのに」

月曜日の通路で、また下田さんに声をかけられた。

「最近の歌、わかんないから。若い子ばかりで行ったんでしょ？」

「そんなに新しい歌ばかりじゃありませんよう。今度、一緒に行きませんか？」

二十代前半の「古い歌」は、三十代半ばには「最近の歌」だったりするんだ。

「あんまり得意じゃないからね。楽しくて、良かったね」

下田さんのヒラヒラしたスカートは、膝頭の覗く長さだ。

「あれ？今日は内勤ですか？」

萩原に声をかけられて、やっと下田さんが横を離れる。

女の子大好きでマメな萩原は、どうも下田さんが気に入らないらしい。

下田さんもそれを理解してて、開発営業部にはあまり近づかない。

尤も、開発営業部で独身なのは、萩原の他には、奥方を早くに亡くした五十過ぎの次長だけだ。

「午前中にちよつと設計して、午後から現場。萩原は？」

「俺はこれから、フォレストハウスです。担当の人が几帳面だから、早めに行かなくちゃ」

席に戻ってPCを開けたら、営業推進室からメールが届いていた。翌日に設計事務所と施主を交えて打ち合わせ会をするので、出席しろという。

課長に報告して、現場との兼ね合いの指示を仰ぎ、午前中はバタバタと過ぎていく。

早めに昼飯にして出掛けようと、作業着に着替えてロッカールームを出たら、水元にぶつかりそうになった。

「おや、現場？行つてらっしゃい」

設備施工部の派遣さんは、「派遣先の会社では人間関係をつくりませーん」って感じの人だから、女の声で「行つてらっしゃい」なんていうのは、滅多に聞かない。

「今日は外が暑いから、脱水しないように気をつけてね」

はいはい、ということを書いて、外出する。

水元とは入社研修から一緒に、特に何かのかわりがあるわけじゃなくて、なんとなく「同志」な気分だ。

結婚式のウエディングドレスは綺麗だったけど、その一年後に疲れた顔で出社していた時も、俺は何もしていない。

仕事に支障をきたすこともなく姓が以前に戻った時も、特に原因を聞いたわけでもない。

あくまでも同期の括りの中の仲の良さで、男と喋るのと変わらない。ただ、他の女の子と気安く口が利けないだけなのだ。

だから現場から会社に戻った時、下田さんから言われた言葉に驚いた。

「水元さんと話してる時って、楽しそうですね」

……楽しそう？普通だぞ。

「そんなことはないと思うんだけど」

「ううん、楽しそう。私も長谷部さんと楽しくお喋りしたい」

ひとりくらい喋る相手が少なくなつて、下田さんは不自由しないだろうに。

「長谷部さんって飲み会にもあんまり来ないし、仲のいい糸川さんとなら、一緒に来てくれるかなあと思つたのに」

糸川とは別に特別仲がいいわけじゃなくて、仕事絡みで教えることが重なつてただけだ。

会社の通路で立ち話つてのも、なんかちょっとヘンな感じ。しかも、特別な話題はないのだ。

下田さんは帰るところらしく、化粧を綺麗にしてバッグを抱えてる。俺じゃ絶対歩けそうもない、華奢な踵の靴を履いて、これじゃ電車は大変だろうなどと、妙なところに感心した。

「ま、お疲れ様。また明日」

とりあえず場を離れようと、帰りの挨拶をする。

「お先に失礼しまーす。残業、頑張ってくださいーい」
うーむ。残業、別に頑張りたくはありません。

席に戻つたら、また生田さんが怒っていた。

「この見積、継ぎ手が断熱の価格じゃねえ！誰だ、これ入力したの！」

女の子に頼んだだけで、まだチェックもしてない。

「おまえの物件だろ？まだ提出してねえよな？俺が気がつかなくや、そのまま提出してたら」

そんな間抜けじゃないつもりだけど、抜けがないとも言切れない

ので、素直に受け取っておく。
生田さんから見れば、設備施工部で唯一年下の俺は、多分いまだに指導対象なのだ。

見積書を見直して、設計をもう一度チェックし終わると、八時になつていた。

「お疲れ様ー」

パーティーションから水元が顔を出し、残っている面子にクッキーだかなんだかの缶を差し出した。

「昼間の戴き物。女の子だけまわしたんだけど、ちょっと残ってるから、残業チームで食べませんか？」

「お、水元さん、頑張るねえ。経理も忙しいの？」
課長の声掛けに、水元が答える。

「派遣さんばかりだと、チェック業務に結構追われるんですよ。一般職でいいから、正社員入れてくれないかなあ」

派遣社員には決裁権が与えられないので、判断は全部正社員の仕事になる。

現在の経理部は、管理職の他に、水元の下に一般職の女の子がひとり、派遣社員ふたり。

「前年度は、見るだけで済んでたんですけどー」
つまり、訂正があるってことだな。

そして、前年度から変化したことといえば、派遣社員が萩原の彼女から、下田さんになったってこと。

俺に内勤の仕事はわかんないけど、間接部門なりのドタバタはあるんだろうな。

「毎日綺麗な格好して座って、給湯室でさぼってばかり」
少なくとも、そう揶揄されるようなバカオーは、そうそう見当たらない。

「さて、もうひとふんばり」

そう言いながらパーテーションから出て行く水元は、左手で自分の
右肩を揉み解していた

営業推進室の山口と一緒に、客先に打ち合わせに出向く。

打ち合わせって言っても、折衝するのは山口のみで、技術的な質問や建築や設備の設計と空調の設計のすり合わせのために同行してるわけだ。

それにしても、と、山口の顔を見る。

俺より下のクセに、室長代理で話を進めるだけあるな、こいつ。

相手の言い分を飲んでるように見えて、実はこっちの都合最優先で話を進めてる。

さわやかにゴリ押しして相手に納得させる手腕を、授けて欲しいものだ。

客先から帰社すると、ちょうど昼休みに入るところだった。

「わあっ！長谷部さんのスーツ姿、初めて見ました。似合うー」

財布を持った女の子集団から、下田さんが抜け出してくる。

……なんだろう、この子。

山口や津田なら確かにスーツは似合うんだが、基本的に作業着の俺は、革靴自体が得意じゃない。

苦笑いした山口が隣をふっと外れて行き、俺一人が下田さんと同じ合ってしまった。

「お昼休みですよね。一緒に行きませんか？」

思わず後退って、首を横に振る。

女の子の集団となんて、どっち向いてメシ食っていいのか、わかんないし。

「やだあ、残念。じゃ、次の機会にまた誘いまーす」

何が「やだあ」なんだか、あのイキオイだと、次にまた声を掛けてきそうだ。

俺に近寄ったって、メリットはないだろうに。

大体、彼女は大きく俺を誤解していそうだ。

はあっと息を吐いて自分のブースに戻り、上着を脱いで財布を持った。

同じことをして通路を歩いてきた山口と、一緒に階段に向かう。

「長谷部さん、狙われてますねえ」

「そんなわけ、ないだろ。やけに懐いてるけど」

本当は、ちょっとそんな気がしてるんだ。

ただ、自惚れた後に当て馬だったってことも、過去に経験がある。

可愛い顔の下田さんは、俺に目をつける必要なんてない。

たとえば仕事ができなくなっただって、一度お願いしたいって男が山ほどいる筈だ。

だから、本当に「気がする」だけね。

「うわ、なんだこの肩、ひつでえなあ。鉄板仕込んでるみてえ」

「デスクの上で丸まりっぱなしだもん。首の後ろも押してえ」

掌で額を押さえ、首の後ろを掴んでやると、悲鳴が上がった。

「痛い痛い痛いっ！やっぱりもう、いいっ！」

給湯室の狭い空間で、水元は腕をバタバタさせる。

「週末に鍼に行くから、それまで我慢するよう」

「鍼？ますますババアか」

「お邪魔しまーすっ」

津田が元気良く入ってきて、自分用のマグにコーヒーを入れている。

「水元さん、また長谷部さんに肩揉ませてるんですか？長谷部さん、力強いんじゃない？」

「いいのっ！長谷部君の指が太くていいのっ！」

「なんか卑猥っすね、そのセリフ」

げらげら笑いあっていると、下田さんが水元を、電話だと呼びに来た。そして俺に、不満そうな視線を投げて出て行った。

「メシ行きませんか？」

糸川に誘われたのは、その日だった。

「ちよつとまだ、かかりそうなんだよなあ。悪いけど」

そう断ると、糸川は困った顔になった。

まだ大学出たてで子供っぽい顔の糸川は、そんな顔を見ると、やけに頼りなく見える。

「何？困りごとなら聞くぞ？」

そう言っと、他の人に聞こえないように顔を寄せてきた。

「長谷部さんを連れて来てって言われてるんですよ」

「なんだあ？喧嘩でも売られんのか？買わねーぞ」

「いや、下田さんなんですけど」

また下田さんか。

俺のどこが気になるんだか知らないけど、オジサンに興味ありそうな顔をするのは、止して欲しい。

免疫ないんだからね、こっちは。

「後からでも、構わないです。『桂林』に居ますから、終わったら来て下さいね」

出て行った糸川を頭から抜き、しばらく目の前の設計に没頭していた。

腹が減ったと思ったら、八時をまわっていて、キリをつけて帰るところにする。

糸川の言葉は頭の隅を掠めたんだけど、出て行ってから一時間以上経過しているし、義理を立てる必要はない。

PCの電源を落として、会社を出た。

「あーっ！長谷部さん、仕事終わっただんですかあ？」

ロビーを出てすぐ、俺に声をかけてきたのは、下田さんだった。

「忘れもの？」

「違いますー。長谷部さんが来てくれないから、迎えに来たのー」

彼女は酔っていて、俺の腕にぎゅっと腕を絡め、胸を押し付ける。

見た目よりボリウムのある感触に、思わずたじろいだ。

「お仕事中なら、横で待ってて連れて行こうと思ってー」

……女の子を横に座らせて、仕事？冗談じゃない。

酔ってるにしろ、それはあまりにも非常識な申し出だ。

黙っていたら、腕を引っ張って「桂林」とは別の方向へ、引きずられていた。

「方向、違うかい？」

「バッグ持ってきたもん。長谷部さんが終わるまで、待ってるつもりだったから」

まだ途中なら、合流した方がマシって流れになってるけど。

「どうせ帰っちゃうつもりだったんでしょ。私と飲むの、イヤですか？」

腕には胸が押し付けられたままで、なんだか犯罪チックな気分だ。

「イヤってわけじゃないんだけどね。苦手なんだ、人間が大勢で騒いでるの」

「じゃあ大勢じゃなくて、私だけなら？」

腕にしがみついたままで、下田さんは言った。

だから、胸が当たるんだってば……って、ええっ？

「酔ってるんでしょ？オジサンをからかうのは止めて、みんなのところに帰ろうよ」

言葉だけだと冷静だけど、実はかなりテンパってる状態だ。

こんなにストレートに「気がある」と態度に出されたことはなくて、しかも、よくわかんない子から。

「やです。言ってることの意味がわからないほど、酔ってません」
だから、胸がね、さっきからずっと腕の中ほどにあるわけです、はい。

これを言っても良いものか。

「長谷部さんと、もっと仲良くしたいんです」

「仲は、悪くはない、と、思うんだけど」

ひとまわり下に、しどろもどろだ。

「水元さんより、仲良くなりたいんです」

「あれとは同期だし、別に特別何かあるわけじゃないし」

何イイワケ口調になってんだ、別に疚しいことなんて何もないぞ。

「彼女いないって言いましたよね。私、立候補します」

スケベ心が湧いたのは、否定できない。

この会話は腕に胸を押し付けられた状態で交わされたものだし、ひとりで居るのもいい加減飽きた。

俺を誤解しててもなんでも、俺に向かって好意があると言っているのだ。

ちよつと良い気分になっちゃっても、無理ないだろう？

すぐに色よい返事ができるわけじゃないけど、下田さんは顔にも身体にも不足はない。

「前向きに、検討しましょう」

「絶対ですよ！」

ぴよんぴよんと小躍りする下田さんの胸が、腕をこする。

うん、ルックスは悪くないよな。

前向きに検討しましょうって、何があるわけじゃない。

俺は下田さんと一緒に飲み食いしたり、映画を観に行ったりしたいわけじゃない。

確かに可愛いけど、それ以外にアピールしてくるものが見当たらないのだ。

あの後下田さんからは、ずいぶんあからさまな攻撃を喰らうようになった。

それはみんな気がついていて、俺がもてないのも、今彼女が居ないのも知っているから、当然俺が応じるものだと思ってる。

正直、居づらい。

朝の給湯室で、下田さんと目が合う。

「コーヒーですか？お茶？」

自分で淹れるから、大丈夫だってば。

「長谷部さんはお砂糖なし、ミルクだけでしたね」

他の人間が居てもお構いナシの彼女の態度に、ちよつと閉口する。

なんで俺で、どこが気に入った。

本当はそう問い質したい。

だけど、一生懸命アプローチされるってのが、そもそも今迄にないことで、それを切り出す隙がない。

そうこうしているうちに、なんとなく「出来上がる間際のカップル」扱いされはじめ、下田さんは下田さんで、金曜日の夕方に設備施工部に無意味に顔を出す。

これで白ばつくれることのできる男がいたら、それは女に慣れているヤツに違いない。

少なくとも、現状を動かさないことにはにっちもさっちも行かなく

なった気分だ。

「長谷部、お待ちかねだぞ」

生田さんにまで声を掛けられ、帰り支度を始めると、ロッカールームの前に下田さんが待っていた。

「一緒に帰りましょう？」

俺、下田さんがどこに住んでるのか、知らないんだけど。

「長谷部さんって江古田ですよ？ 私は千代田線だから、この近所で食事が都合いいですよ」

「俺、住んでるところなんて、教えたっけ？」

「総務の人が、言っていました」

おい、総務！個人情報漏れてるぞ！

俺の頭の中に構わず、下田さんは話を進めていく。

「どこか、オススメのお店、ありますか？」

柔らかそうな髪が、ふわっと揺れる。

小さい顔と女の子らしい仕草は、ちょっと庇護感情をそそる。

可愛いし、勘違いでもなんでも、俺に好意を抱いてくれる。

こんな子を見逃したら、当分彼女なんてできないかも知れない。

流されるがままでも、別に構わない……か。

会社から少し離れた多国籍料理の店で、ただ夕食をとっただけだ。

喋ったのは八割下田さんで、相槌を打った六割は、内容が理解できなかった。

「長谷部さんって落ち着いてて、安心なんです」

落ち着いてるわけじゃない、反応が遅いんだ。

何故反応が遅いのかというと、興味の範囲が違いすぎて、ついていけない話を頭の中で噛み砕こうとしてるから。

何度も聞き返して、気分良く喋っているのを遮りたくなくて、曖昧に頷いているうちに、話が変わっていく。

下田さんは終始にこにこしていて、それは可愛らしいんだけど。

結局、何のことはない普段の続きで、やけに疲れが残っただけだった。

社内で「別に好きじゃないけど、一回お願いします」なんて態度をとれるわけじゃないし、俺に対する下田さんの誤解が深まっただけ。

「また、お喋りしてくださいね」

そう言つて地下鉄の通路に消えた下田さんの笑顔を思い出し、溜息をついた。

嬉しくないわけじゃないんだ。

こっちからも好意を抱いているのなら、願ったり叶ったりなんだけど、どうもピンと来ない相手なんだよなあ。

俺だって男だから、可愛い女の子は好きだ。

そっちの件に関してだけなら（そっちであっちだ）、迷わずにおつきあいしたい。

でも、そういうわけに行かないだろ？

翌日の土曜日は思いっきり寝坊して、洗濯だけで終わった。

その翌日も、テレビ見てネットサーフィンしたら、終わってしまった。

こんな生活が続くんなら、好意を持ってくれる女の子と、とっととどうにかなってしまえ、と自分の声が聞こえる。

もう十年若ければ、迷わずにそうしていたらう。

今の俺には、この先が透けて見えてしまう。

俺に失望して去られるか、食い違いで破綻を来たすか。

結局、可愛い女の子に好意を示されて、喜んでいるだけなのだ。

俺は下田さんの中身に興味を抱いたことはないし、俺自身を見ても
らいたいと思ったこともない。

だから、これからしなくちゃならないことは、下田さんとは上手く
いかないと思うと、きっぱり伝えること。

そのタイミングを計るのは、俺自身なんだけど。

…… 苦手だ、それ。

彼女が目覚ましてくれるの、待っていたいんだけどなあ。

その間にあわよくばってのは、スケベ心でしかない。

そうなってしまうても彼女自信に興味を抱けなかったら、傷つくの
は俺の方じゃない。

「長谷部さん、今週の土曜日はお時間ありますか？」

下田さんに声を掛けられたのは、水曜日の朝だった。

「いや、特にはないけど」

給湯室でしたい会話じゃないなあ。

彼女は派遣社員だから、任期が終わればいなくなるけど、俺はずっとここにいるのだ。

「じゃ、どこかに行きませんか？」

ここで黙ってしまうのが、俺の悪いところだ。

「長谷部君、おっはよー」

水元が入ってきて、下田さんは話を打ち切った。

「じゃ、長谷部さん、また後で」

俺もコーヒーを貰って出ようとすると、水元が話し掛けてきた。

「下田さんとききあうの？」

そう、なつちやうのかなあ。なんだかずるずると、引き摺られて行くような気がする。

「長谷部君が、振り回されるだけ振り回されそうだね」
今、まさにその自覚はある。

「水元は、もう結婚しないの？」

バツイチなんて珍しい話じゃないし、水元はいいヤツだ。

「うーん。そう決めてるわけじゃないんだけどね。ま、めぐり合わせだから」

ちよつと肩を竦めた水元は、自分のカップにコーヒーを注ぐ。

冷え性の肩凝り、内勤の総合職は少ないから、現場に出ている俺より、責任は重い筈だ。

「いい男、いるといいな」

心の底からそう思う。

離婚の原因は知らないけど、やつれた顔をして仕事していた水元は、知っている。

「長谷部君に心配される筋合いはないの。自分がガンバレ」
オトコマエな仕草で拳突き出した水元と、拳をぶつける。

若くはないけど、そんなに年を喰ってるわけでもない。

下田さんと一緒に出掛けるくらい、いいか。

俺も彼女を知らないんだから、知ってみる努力くらいしてもいいかも。

「いいよ。じゃ、美術館にでも行ってみる？」

下田さんにそう言ったのは金曜日の朝だ。

「美術館？ やっぱりオトナな趣味ですね。いろいろ教えてください
ね」

好きなだけで、別に詳しくはない。

「下田さんは普段、どんなところに出掛けてるの？」

「カラオケとか、ショッピングとか」

うーん。それは俺の行動パターンの中には、ない。

下田さんに行った美術館はとても混雑していて、人酔いしそうだった。

ひとりで出る時は混雑する午後を避けて昼前に動くので、それだけで結構疲れる。

「美術館なんて、小学校の社会科見学以来。絵だけじゃないんですね」

下田さんの感想は、絵やオブジェについてではなくて、「美術館」についてだった。

つまり、併設のカフェやミュージアムショップの佇まいについて、だ。

「おうちのダイニングがこんなにシックなら、ステキですねえ」

「ショップなんてあるんですね。雑貨屋よりセンスのいいディスプレイ」

うん、美術館や博物館に興味のなかった女の子なら、当然の反応なのかも知れない。

可愛い女の子が隣を歩いているってのに、一向に上がらないテンション。

仕事の義務で接待してるみたいな気になるのは、職場以外の顔が見えないからだと思うんだけど、オンもオフもこういう子なんだな。よく言えば裏表なく、悪く言えば深みがない。

素直なんだけど、自分の中に溜め部分は少ない。

若いから、なんて言葉は爺むさいけど、実際にそのギャップは大きい。

「長谷部さん、聞いてます？」

「ごめん、ぼうつとしてた」

だって、下田さんのカラオケの点数が何点だって、聞いたって仕方

ないだろ。

「これからどうします?」

軽い夕食を済ませた後、下田さんが言った。

「どうもこうも、俺は帰るつもりだった。」

「軽くお酒?それとも、カラオケでも」

「いや、そろそろ帰ろう?駅まで送ってくから」

「また誘ってくれるんなら、帰りますけど」

面白くなさそうな下田さんを地下鉄の入口まで送って、ふうつと溜息をついた。

下田さんは、あれで楽しかったのか?

話が弾んだわけじゃないぞ?ってか、相変わらず意味がわからなかったぞ。

チエツクの半袖シャツから出た自分の腕を、無意味にさすってみた。贅沢を言える立場でも、イキオイで恋愛できる年齢でもないんだ。

だからって、手近に懐いてきた女の子とどうにかなるうなんて、相手に対して失礼じゃないか。

二度目はないことにしよう。

下田さんがどう考えていても。

「土曜日は、ありがとうございました」

月曜日の朝、にこにこしながら下田さんが言う。

「あ、いや、どうも」

こんなタイミングで、「次はありません」とは、とてもじゃないが言えない。

こうやってどんどん、タイミングを逃していくんだ。

営業開発室の山口が、珍しく作業ジャンパーを着て、一緒に現場に来るという。

「山口、作業着似合わねえなあ」

「長谷部さんが似合いすぎるんですよ。ザ・現場の人」
作業着がやけにハマっているのは、自覚している。

我ながら、現場仕事自体が向いていると思うし、俺には事務も営業も無理だ。

ヘルメットを抱える山口を、横目で見る。

整った顔と長い足は羨ましいが、こいつの外見で俺の中身なら、アンバランスこの上なし、だ。

グズグズした性格じゃあない筈だけど、「打てば響く」とは言えない。

まあ、ごつごつした外見に、ごつごつした中身が入ってるだけのことだ。

遅くなって現場から帰社すると、給湯室で水元がおかしな動き方をしていた。

「何してんの？」

「腰痛体操」

痛いときにそんなことをしても、すぐには治らないんじゃないかと

思う。

「目の疲れが肩に来て、肩から腰に来るの」

そして、当然のように俺に肩を向けた。

「なんだ？俺は水元の専属マッサージ師か？」

「いいじゃない。女の肩なんて、滅多に触れないでしょ？」

襟に手をつ突っ込んでるんならともかく、服の上からじゃときめかない。

「下田さんとデートしたんだってねえ」

世間話のように水元が言う。いや、世間話か。

「早いな、土曜日の話だぞ」

「ロツカールームで下田さんが、はしゃいでたもん。仕事もあれっくらい熱心になってくれるといいんだけど。さて、さんきゅ。もうちよつと仕事してくわ」

水元は独身だから、遅くなっても誰も気にしない。

「水元、ひとり？」

「課長がまだ残ってる。大丈夫だよ、煮詰まってるから」

笑った顔は、相変わらずのオトコマエだ。

女の子に向かって怒鳴るなんて、萩原らしくないじゃないか。しかも相手は一般職とは言え、萩原より2年先輩（つまり、同じ年）だ。

口を突っ込むつもりはなかった。

泣きそうになっている経理の女の子に、俺も用事があったから、ということにしておく。

「ねえ、指定請求書の送付先に、ウチの打ち出しの請求書が送付されてるみたいけど」

そう割り込んだら、萩原の怒りはその部分だった。

説明しておく、エア・トラッドの打ち出しの請求書っていうのは、基本的に打ち込んだ売上がすべてアウトプットされる。機器販売だけなら、別に何の問題もない。

問題があるのは「工事一式」だの「コミッションのあるもの」、もしくは客先が請求形式を指定している場合だ。

「工事一式」で請け負っているのに、売り上げとしては細々と人工代やら材料代やらと計算しているので、それを相手に見せたくなくて、営業からの申請で、別の書式に変更する。

「申請書、わざわざ手渡して念押ししたろ。うるさい会社だからって」

「ごめんっ！ちょっと会議室に入ってたっ！」

割り込んできた水元に、三人とも会議室に押し込まれて、半泣きの経理の女の子は水元の隣に座った。

「明日、各担当者と客先に、課長からお詫びの連絡するところだったの。偏に私の指導力不足っ！申し訳ない！」

両手を合わせる水元の、言外の意は理解できた。

今までなかった頻発するトラブルの原因は、アレだ。

一緒に手を合わせる女の子に、萩原も怒り続ける気は殺がれたらしい。

「派遣、交代しないんすか？」

その代わりのように、辛辣とも言える言葉が出た。

「ここだけの話、今、派遣会社と折衝中。条件だけは、派遣会社に依頼通りなの」

主語のない会話なのに、誰の話だか全員が理解してる。

「決定じゃないし、本人も知らないから、口外無用よ。特に長谷部君」

いきなり名前を呼ばれて、驚く。

「ピロウトークでも、止めといてね。私も今逆上気味だから。自分の指導力に、自信なくなっただわ」

ピロウトークってね、そんな関係じゃないんだけど。

経理部二名が会議室を出て行き、萩原は盛大に溜息をついた。

考えてみれば、こいつの彼女は前年度経理の派遣社員で、問題が多くて契約更新しなかったのだ。

水元も、気が休まる暇がないだろう。

翌日、各部署に経理課長から詫びが入り、ぐずぐずと文句を言う営業に、水元が頭を下げて回った。

落ち込んでるかなと思った下田さんは、コトの重大さがわからないらしく、普通の顔でロッカールームに出入りしている。

派遣社員交代の話を派遣会社から聞いたなら、多分驚くんだろうなあ。そんな気がする、木曜日の晩。

「長谷部さん、今帰りですか？」

ロビーで後ろから声を掛けられ、驚いて振り向くと、下田さんだった。

「あれ？月末以外で派遣さんが残業？」

「怒られてたんです。勘違いしちゃってて、誰もチェックしてくれないし」

「……派遣、三ヶ月目だよ。先月にやったこと、メモにしていなかったの？」

「してたんですけど、マニュアルも作ってくれてないし」

マニュアルにするほど大層な業務じゃなければ、口頭の指示で済ませているんだと思う。

「……大変だったね」

本当に大変だったのは、経理部の他の面々だったと思うけど。

「だから、しよげてるんです。帰り間際に長谷部さんに会えて良かった」

につこり笑う下田さんに違和感を感じながら、地下鉄の入口横のコーヒーチェーンに誘導される。

「ちよつとだけ、愚痴聞いてもらいたいなー、なんて」

半泣きの経理の女の子と、鉄板を仕込んでいるような水元の肩が、

ちらつと頭の隅を掠めた。

「私、派遣先チェンジしてもらおうと思ってるんですよ。正社員の人たちは何も教えてくれないし、同じ派遣の筈なのに、私じゃない方の人とばかりランチとか行くし」

もうひとりの派遣さんは、今年で三年目だから、それだけ気心も知れてるんじゃないかと思う。

「水元さんなんて、私が長谷部さんとデートしたからって、冷たいんですよ」

「俺？」

思わず、声が出た。

「水元さんって長谷部さんのこと、好きじゃないですか」

「それは、違うと思うけど。そりゃ同期だから、他の人より話すことは多いよ？でも」

突拍子もない妄想だ。俺と水元は、そんな間柄じゃない。

「一回結婚してるんだから、遠慮して欲しいんですけど」
「なんだ、そりゃ？」

どう否定しようかと考えているうちに、下田さんの愚痴は発展していく。

「いつも忙しそうだから、わかんない処理を聞くのも悪いかなーと思つて、こうだろうって処理すると、違うって怒られるし」

「わからない処理の質問しても、怒られないでしょう」

「だって、先月教えたでしょ、とか言われて」

ああ、頭を抱えた水元が浮かぶ。経理の処理に曖昧が許されないのは、俺だって知ってる。

「下田さん、専門職派遣だよね？」

「そうです。ビジネススクールで、経理の勉強しましたから」
そうか、条件は合ってるって言ってたな。

派遣先が交代を希望していて、派遣社員がそうしたいと言えば、それでOKなんじゃないかと思うんだけど、契約の中には色々あるのかも知れないので、俺には何も言えない。

「派遣先変わっても、長谷部さんには会いに来ますから」

「ええっと」

「今週末、どうします？」

「えええっと」

なんだか考えが纏まらないうちに、週末の約束に巻き込まれる。

二度目はない、どこの話じゃない。

「下田さんくらいの子から見て、俺ってどんな風なのかなあ」

俺からすれば当然の疑問なのに、下田さんはけらけらと笑った。

「頼り甲斐があつて、落ち着いてて。オトナだなーって感じ」

すっげー誤解。

俺が落ち着いて見えるのは、俺の代わりに誰かが主張してくれるか

らだし、中も外も十年前と大して変わってない。

「俺ね、昔っから年寄り臭いって言われてたんだけど」

「昔からオトナっぽかったんですか、いいなあ。私なんて落ち着きなくってえ」

物は言いよう。

勝手に喋って勝手に機嫌を直して、下田さんが帰っていく。

悪気はないし、可愛いんだよな。

だからつい、週末の約束をしちゃったのだ。

にもかかわらず、相変わらず下田さん本人への関心なんて、全然抱いてない。

それでも彼女は、満足なんだろうか。

「えええっ！今日も帰っちゃうんですかあ？」

昼過ぎに待ち合わせて映画を見て、更に夕食も済んだ土曜日の晩。

「明日も休みなんだし、もうちょっと遊びましょうよ」

俺の腕にぎゅっと巻きつく細い腕。

だからね、そうすると、胸がそのまま押し付けられるんです。

「遊ぶって言っても、俺は夜の遊び方なんて」

「お酒飲みましょう？ね、もうちょっと」

止しとけよ、そう頭の中で、自分の声がする。

こんな状態で女の子に誘われたら、のっぴきならないことになるぞ。その気なんて、全然ないくせに。

腕に感じる胸は、なんだかそのままベッドに直行許可みたいで、へタな妄想をしそうだ。

このまま酔わせてやっちゃおうかな、なんて不埒なことを考える程度には。

たとえば萩原あたりなら、遠慮せずにいただいちゃうだろう。ダメだって。俺はそんなに器用じゃない。

「下田さん」

今だ、今なら次はないって言える。

「はいっ！」

お預けを解かれたワンコみたいな顔で、良い子のお返事をする下田さん。

「……送って行けないから、遅くなったら危険でしょ？」

誰か、俺の阿呆を怒鳴ってくれ！

「私の家、大通り沿いですから、そんなに怖くないですよ」

「女の子が夜中にひとりで歩かない方がいい」

うーわっ！分別＆オヤジ臭い、良い人発言だ。どの口がこんなこと言ってる！

「わかりました。来週にします」

口を尖らせた下田さんが頷く。

待て待て待てっ！誰が来週約束した？

「月曜にはまた会えるんですもんね」

いや、普通に仕事に行くだけなんだけど。俺は、阿呆だ。

「来月、お誕生日でしょう？どこかに行きます？」

総務！総務！個人情報ば！

「とりあえず、おとなしく帰ります。おやすみなさい」

地下鉄の入口に消える下田さんを、呆然と見送る。

なんだかもう、話が「つきあってる人たち」だ。

手を出そうが出すまいが、そんなことは関係ないらしい。

週半ばに派遣会社に呼び出された下田さんから連絡が来たのは、そんなに早い時間じゃなかった。

『今月で、エア・トラッドの契約、おしまいだそうです』

「チェンジしたいって言ってたもんね」

『水元さんが、仕組んだんです。私のこと、きらいですから待て。どこからそんな発想が出る。』

『長谷部さんが私とつきあってるから、気に入らないんです』
待て待て。俺は下田さんのことは知らないが、水元のこととはよく知ってる。

「気のせいじゃない？公私混同する人間じゃないよ」

頭を下げて歩いていた水元は、下田さんのせいだとは言ってなかった。

それに、派遣先チェンジするって言ったのは、下田さんじゃないか。

『水元さん、ちよつとのミスで課長に言いつけるし、いつも後ろで監視してて』

「報告義務があるし、責任者だから全部見てない」と

『ほら、長谷部さんには良い顔しか見せてない。私にだけ冷たいんだもん』

機嫌を取るような真似はしなくても、水元なりに気を遣っていた筈だ。

『私には何も言わないで、派遣会社に直接交代の申し出るなんて「契約の関係があるから、直接は言えないんじゃない？」』

『だって、それとなく言ってくれたって！』

仕事ができないから来ないでください、なんて、本人に向かって言えないだろう。

『私だって一生懸命仕事して……』

泣くのか、おい。何か酔ってないか。

「あのさ、なんで契約切られるのか、じっくり考えた？」

『水元さんのイヤガラセに、決まってるじゃないですか』

決まってるのか？ってか、自分自身の反省は、ないのか？

なんだかもう、可愛いとか胸がとか、そういう問題じゃない。

なんていうのか、この子、気持ち悪い。

全部自分のせいじゃなくて、一生懸命って言葉の使い方が間違ってる。

自分は辞めたいって言ったのに、他人からのそうしろって言われて自分の非を全力で否定してる。

「水元はね、自分の指導力不足って、他の部署に頭下げてたよ」

下田さんが返事をする前に、続ける。

「今まで、どんな派遣社員が来てもなかったトラブルが頻発してるんだ。意味、わかる？」

『だって、教えてもらってなくって！』

「自分の首が絞まるのに、指導しないわけ、ないでしょ。ちょっと冷静になりなよ」

我ながら、冷たい声だ。

下田さんの声を、それ以上聞くのはイヤだった。

水元がどんなに大変な思いをしているのか想像もできないくせに、自分に都合のいい解釈で、もっともらしく話を作ってる。

『長谷部さんも、私のこと責めるんですね』

「責めるわけじゃなくて、時々は反省した方が……」

『水元さんに嫌われてるのは、私のせいじゃありません』
だめだ、こりゃ。

どうにかこうにか電話を切って、ついでに電源も切った。

矯正してやろうって気にならないのは、俺が下田さんをどうでもい
いと思ってるってことなんだな。

呆れただけで、本人に対しての感情なんてない。

はじめからそうだったのに引き摺られた俺が、一番情けない。

「肩、揉んでやろうか？」

半分以上灯りの消えたフロアを、水元がボールペンの尻で肩を押しながら、歩く。

俺の顔を見上げた水元は、視線を固定して、断った。

「ありがとう。でも、要らない。彼女が不愉快でしょ？」

彼女って、下田さんのことか？

まだつきあってるって関係でもないし、俺にその気はない。

「長谷部君だって、自分の彼女が他の男の肩揉んでたら、イヤじゃない？想像してごらん、山口君の肩揉んでる下田さん」

言い返す前に、頭に思い浮かべてみる。

……野口さんから山口を奪うことは、不可能だろう。

あれ？労ってるとか仲が良いとかの連想じゃなくて、そっち？

下田さんのイメージ自体が、「他人に気遣いをすることの代償を欲しがる人」なんだな。

そうか、はじめに声をかけてきた時も、糸川目当てだと思ったな。その時から全然乗り気じゃなかったのに、あの顔と押し付けられた胸に浮かれてたんだ。

「俺、下田さんときあってるつもりは、全然ないんだけど」

「またまたあ。毎週デートして、帰り時間の心配までしてやって」

情報ダダ漏れ？ってか、自分の都合のいいようにしか解釈してない！

「ごめんね。仕事、引き離しちゃって。だけど私も限界だったの」
くるりと踵を返した水元の肩を、思わず掴んだ。

「違うんだって！」

もう、限界だ。思いの外早い限界だけど、我慢する必要はないんだ。

可愛いけど、悪気はないけど、素直だけど、好意を抱いていない俺には、美点より欠点が先に立つ。

はつきりしなかった俺が悪い。

ひとまわりも下の、思い込みの激しい社会経験の少ない女の子。大人になるまで待つてやる力も、導いてやる力も、俺にはない。わかってるのに、自分でずるずる引き延ばしてた。

「しみじみと、情けないんだけどさ」

「長谷部君が情けないのは、知ってるよ」

水元は面白そうに笑って、話を聞く姿勢になった。

気を張らないで話せる女は、オトコマエに俺の話を引き出し、「あんたが悪い」と結論付けた。

「手、出さなくて良かったね。一方的に被害者面されるところだわ」
本当にその通りだ。

他人に言葉にしてみせて、やっと決意が固くなる。

「今度は引つ張られなくて済みそう。感謝代わりに、何か奢る」

酒が飲めない水元に、一杯奢るってわけにもいかないから、ランチくらいかな。

「なんで？彼女いないって言ったじゃないですか。先週の土曜日も、また来週って」

「俺は、そうは言っていない。否定しなかったのは悪かった、謝る」
「信っじらんないっ！」

下田さんは思いつき顔を歪めた。

「じゃあ、なんで二週もつきあったの？長谷部さんも私のことを好きだと思ってたのに」

違和感、ありあり。下田さんが俺を好きだったことも、多分ないと思うぞ。

「本当にごめん。だけど下田さんは、俺と合わないと思う。見えてるものが、違いすぎる」

「その気もないのに、私とつきあったんですか」
いや、つきあった気はまったくないんだけど。

良かったよ、仕事が終わった時間に捕まえて。

これが会社の通路なら、明日は仕事に行けないんじゃないかと思う。

「長谷部さんって、はつきりしない人なんですね」

黙っていたら、下田さんが引導を渡してくれた。

これに感謝して、良いのだろうか？

残った仕事を片付けに、会社に戻る足は重かった。

半分くらいは、俺が悪い。

引き摺られたことを言い訳に、あわよくばってスケベ心を満たそうとしたことは否めない。

下田さんに好意を抱けなくとも、彼女にも感情やプライドはあるのだ。

他人のせいにしたのは、俺も同じだ。

引導を渡させたのも、俺だ。

もうちょっと前に、こっちから引導を渡してやりさえすれば、無駄に腹を立てさせることはなかったのに。

「長谷部さん、メシ行きませんか？」

残業を終えた津田が、ひょっこり顔を出す。

「今日、瑞穂と暁くん、保育園のイベントで外食なんです」

デスクの上を片付けて、パソコンの電源を落とした。

家に帰っても落ち込むばかりだし、津田みたいにストレートな男は、話すのが楽だ。

俺より10センチばかり長身の津田は、猫背気味に居酒屋のカウンターに座った。

微笑ましいマイホーム・パパの津田が、実は結構オトナだっているのは、ちゃんと喋らないとわからない。

逆に、ちゃんとコミュニケーションしてるからこそ、腹を割った話が怖くないんだ。

そう考えると、下田さんには本当に申し訳ないことをしたんだと思う。

だけど、これから先はもう、ないんだ。

そう思ったことで気が軽くなったのも確かで、やけに調子良く飲んだ気がする。

「珍しいですね、長谷部さんが酔っ払うの」

鈍った耳に、津田の声が聞こえた。

翌日出社して通路で下田さんに会つと、思いつき顔を背けられた。「フンッ！」なんて言葉が聞こえそうだ。

ついでに、何人かが遠巻きに自分を窺っているのがわかった。情報、本当に早いな。

どんな風に伝わっているのかは、想像に難くない。

いいよ、否定はできないからね。

もともと喋るのは得意じゃないし、アピールできるほどの何かを持つてゐるわけじゃない。

だけど、こんなことで注目されたくはないなあ。

現場に出ちゃえば、会社の中のことは関係ない。

別に敵を作ったわけでもないし、下田さんが派遣を終えれば、じきに忘れられてしまうようなことだ。

女の子に声を掛けられたら、もう少し慎重にしようとは思うけど。

まあ、一生に一度の出来事だったかも知れないとは思ふ。

「長谷部、惜しいことしたな。あんな若い女、二度と捕まらないぞ」
生田さんまで笑いながら言う。

どこまで広がっているのか、恐ろしいものはある。

「俺の嫁さんと交換しろって言われたら、交換してやるのによ」

「いや、若すぎて俺には合わないっていうか」

「長谷部は気迫が足んねえんだ」

気迫ねえ。それで年寄り臭いと言われるんだろうか。

女の子たちとはますます距離が離れ、事情を知らずに噂だけを知った上司からは、早く仲人をさせろと言われ、どっち向いていいやら、弁解をしたくないわけじゃなくて、何を言っているものやら、見当がつかないだけだ。

俺は確かに悪かった。けど、そんなに非人道的なことをした覚えはない。

「若い女の子をからかって楽しんだ」わけじゃないんだ。そんな器量はないし、ガラでもないじゃないか。

「ま、言いたいただけ言わせちゃえばいいじゃないですか。どうせ居なくなっちゃうんだから」

山口がクールに言う。

焼き鳥を横啜えしても、サマになる男だ。

「まあね。女の子の評判、落としちゃ気の毒だし」
くつくつと笑いながら、山口は俺の背中を叩いた。

「長谷部さん、人が好過ぎ。わかってる人には、彼女の評判は地底だし。野口なんて、家で大悪態」

「おまえ、自分の奥さんを、家でも旧姓で呼んでんの？」

「そんなわけ、ないじゃないですか。長谷部さんって素直で、俺、大好き」

山口に好かれても、大して嬉しくはない。

こうして、「おっさんとお兄さんの中間あたり」に囲まれる日々は戻ってきた。

女の子は可愛いし良い匂いだし、俺も一生独りで居たくはない。

だけど、俺を気に入ってくれれば……なんて考えは、捨てた方がいいらしい。

合わない相手を大切になんて、できっこないのだ。

派遣社員の入替えで、経理がまたバタバタし始めた。

今度こそと思うのか、水元は常に気を張っているみたいで、帰る頃にはぐったり疲れた顔になってる。

ただ、俺に肩を差し出すことがなくなった。

無意識だろうけど、首をぐるぐる回しながら給湯室でコーヒを淹れていたりする。

こっちから「肩を揉ませろ」なんて言うわけにもいかず、ひどいんだろつなと予測する程度だけだ。

冷房に弱くて、夏になると社内で薄い上着を引っ掛ける水元の手足は、多分冷たい。

「胃が気持ち悪いから、帰る。お先に」

そう言っ水元が会社を出て行ったのは、6時過ぎだった。俺が会社を出たのは、その30分後だ。

駅のベンチに座った水元を見た。

目を閉じて、眉間に皺を寄せている。

「おい、どうした？具合悪いのか？」

そう声を掛けると、ゆっくり目を開いた。

「なんかね、上手く立ってられないの。混んだ電車だと自信ないから、ちよつと空くの待ってる」

「気持ち悪いのか？」

「吐きそうなんじゃなくて、なんかこつ、目眩みたいなの。歩いてる分には、それでもないんだけど、直立してるとまわる」

顔色は悪くないけど、辛そうだ。

「水元って家、どっちだっけ」

「氷川台。だから、赤坂見附で乗り換えるんだけど」

方面は、俺と一緒にだ。俺は途中で路線が変わるけど、ターミナル駅で空き座席は見つかるだろう。

「とりあえず、池袋まで一緒に乗ってこよう。掴まってていいから」次に来た電車と一緒に乗り込み、地下鉄の階段を一步一步確かめるように乗り換えた。

歩いている分にはそうでもないなんて言ったけど、結構ふらふらで、何度か歩調を緩めた。

下田さんみたいに、腕にぎゅうつとしがみつくんじゃなくて、肘に手を添えている程度だからかも。

ラッシュアワーじゃないけど、つり革は一杯程度の電車の中で、水元は体重を預ける場所がない。

「ごめん、ちよつと寄りかかっていい？」

「疲れてるんだろう。いいよ、体重かけて」腕にでも掴まるつもりなんだと思っていたから、肩に額が寄せられて、慌てた。

「ごめん。池袋まで、失礼」

そっち側の手をどうしたものかとあたふたして、結局水元の腰を支える。

電車の中の恋人たちみたいな格好だけど、そうじゃないと体勢が安定しない。

肩が薄いのは知ってたけど、腰も細いな。

ああそうか。オトコマエだけど、こいつも女だったか。

気が抜けない業務が続けざまで、気を抜く暇もなかったんだろう。

ターミナル駅で空いた座席に水元を座らせ、電車のドアの外側から手を振った。

翌日元氣に出社した水元を見て、ちょっと安心した。
あんなに疲れるまで、張り詰めなくてもいいのに。

でもそれが水元の水元たる部分だし、だからこそその信賴つてのも大きい。

「おはよ、長谷部君。昨日はありがとね」

「おう、よく寝たか？」

「晩御飯も食わずに寝たわ。おかげで、朝から空腹で目が覚めた」
笑いながら通路を歩いていく水元を、ちよつと振り返って見た。
腰、細かったよなあ。痩せてるわけでもないのに。

男ばつかりと喋る職場は、色気はなくとも気楽だ。

作業着と安全靴は、しゃれっ気なんて出したくても出ないし、ヘルメットを被るわけだから、髪も短きゃいい。

余所の部署の若いヤツなんかは、帰社するとせつせと洗面所でワックスを使っていたりするけど、俺は帰って寝るだけなんだから、そんな必要もない。

「長谷部さん、設備施工部、忙しいですか？」

萩原が顔を見せる。

「ああ、津田から連絡来てたヤツ、今回はちよつと無理だわ。そっちが使ってる工事業者と違うところ、いくつか紹介するから、あたってみて」

「長谷部さんが無理って言う時は、どうにも調整がつかない時ですもんね」

萩原にいくつかの社名と電話番号をメモして渡す。

「俺には相談しないのか、萩原？」

今日は機嫌の良い生田さんが、コーヒーを啜りながら言う。

「生田さんなんて、大文句言って説教した拳句に『ダメ』じゃないですか」

「説教は俺のライフ・ワークだ。つきあえ」

なんであんなにぼんぼんと、軽口に持ち込むことができるんだろう。言葉だけ聞いてると、とんでもないやりとりでも、本人たちは気軽に楽しげだ。

別にクソ真面目なつもりはないけど、言葉尻に怯んでしまう俺に、あのテンポの会話はできない。

後ろから肩を叩かれ、振り向くと水元と新人さんが立っていた。

「今月の経費、出たよ」

財布が薄い時期に差しかかっているの、どうもどうもと受け取ってから、思い出した。

「あ、水元に昼メシ奢んなくちゃ」

「なんで？」

あれ、なんでだっけ？ま、いいや。

「いや、前にそんなことを言った気がする」

「光栄だけど、お弁当持参なの。夜にしない？」

「高価いじゃん」

「お酒飲まないから、そんなでもないでしょ。はい、決定」

答えそこねると、水元は新人さんを連れて去って行った。

水元と帰り時間が合ったのは、数日後だ。

「暑いねえ。ビール、ちよっともらおうかな」

「飲めないじゃないか」

「だから、続きは長谷部君が飲んで」

普段からよく使う居酒屋のカウンターで、水元はメニューを広げた。

「ほっけと御新香、茶碗蒸し」

「メシが欲しくなる組み合わせだな」

「ひとりだと、魚って外でしか食べないよね。ワンルームだから、換気扇小さいし」

そう言えばそうかな。俺も自分のアパートで、魚は焼かない。

考えてみたら、水元とふたりだけって初めてかも知れない。

男同士みたいな気楽さで誘ったけど、並んで座っても顔の高さが違う。

「今度の派遣さん、どんな感じ？」

「ああ、常識的には良い子だよ。ちゃんとメモもとるし」

乾杯、とジョッキを合わせる。

「何に乾杯？」

「長谷部君のスキヤンダル終焉に」

スキヤンダルだったのか……

「やだ。がっかりした顔しないでよ、冗談なんだから」

慌ててとりなされて、却って申し訳ない。

ここで気の利いた言葉が返せれば良いのに。

「下田さんができないのは確かだったけど、私も幾分、私情混じっちゃったかな」

水元がらしくない発言をする。

「元ダンナの浮気相手が、あのタイプだったのよね。可愛い顔して無邪気装って、自分の感情のゴリ押し。最終的には妊娠までされたら、もう戦えないじゃない」

ビールをウーロン茶に変えた水元は、一気に吐き出した。

「相手がどんなタイプだったか、よく知ってるな」

「私を通して知り合ったんだもん。大学の後輩よ。もう二度とOB会なんて、行かないけどね」

離婚の原因は相手の浮気だったのか。

「社内の人に、こんなこと言ったことなかったんだけどなあ。長谷部君相手だと、気が緩むな」

水元は誰とでも卒なく喋るし、仕事に緩みがないので、社内での信頼度は高い。

子供が居ないから残業も頼みやすいし、経理の上の方もそれに寄りかかってる感じはある。

「ところで、生田さんのとこ、三人目だった？」

話を変えるのは、それ以上話したくないってことだろ。

「そうそう、もうじきじゃなかったっけ。一番上が幼稚園に入っただけ」

「奥さんの実家で、二世帯住宅建ててくれたって言ってたね。私の実家も、妹が入るみたい」

家を建てるとか親の老後とか、そんな年回りなのだ。

ぼんやりしているうちに、本当にジジイになっていく。

「最近、肩揉めって言わないなあ」

「あれ、そうだった？」

きよとんとした顔は、本当に気がついていなかったらしい。

「ちよつとはマシなのか？」

「んーん。鍼に行った後は、何日かいいんだけど」

どれ、と肩に指を掛ける。

「冷え性だからじゃないのか？身体動かしたら？」

「運動神経、ぶつちぎれてるもん。生姜サプリは飲んでるんだけどな……って、痛い……会社の冷房で足が冷えちゃってねえ」

「本当にババア」

「同い年じゃない。これから一花も二花も咲かせようっていう……痛いって」

「水元、彼氏いるの？」

「ああ、バツイチはもてるって話だねえ。話ただけけど。どこで見つけろって言うのよ」

水元が茶碗蒸しをスプーンで掬って口に運ぶ。

口紅がかすれて、素の唇の色が見えてる。

水元って、女だったんだな。改めてそう思った。

気を張らずに喋れるし、仕事も信頼できて、同じ年数だけ同じ場所にいる同志だけど、女なんだ。

すっかり忘れてたけど、体力は俺より格段に低くて、もしかしたら子供なんかも産むんだ。

「痛いから、もうっ！」

水元が肩を引く。無意識に水元の首を揉んでいた俺は、ぼんやりとしていた。

「長谷部君、酔った？お開きにしようか」

水元が俺の顔を覗き込む。

酔ってない、酔っちゃいないんだけどさ、なんか調子が狂う。

「ま、明日も仕事だしな」

「そうだねえ。ああ、明日でやっと金曜日なあ」

「俺は土曜出勤だぜ」

「はいはい、お疲れ様。いいじゃない、デートの予定があるわけじゃない。しっかり稼いで」

そうだな。気詰まりなデートは、もうない。

家でテレビ眺めてるよりは、いいか。

池袋まで一緒に出て、閉まるドアに向かって手を振る。

去っていく窓越しに見た水元は、俺が思っていたよりも、頼りなさげに見えた。

離婚した後も、水元は気丈に仕事を続けていた。

姓を戻した時、理由を聞かれることも多かっただろう。

その度に、傷ついたことを思い出しただろうか。

客先との打ち合わせがあつて、スーツで出勤した日。

「おや、今日はどこ？」

「水天宮。昼メシは親子丼だ」

「並ぶの？いいなあ。私、行ったことない」

水元とそんな会話をしていると、津田がのんびりと顔を出す。

「ウチ、戌の日のお参りの時に行った！。好みが分かれるよね、あれ」

「津田君も行ったことあるんだ！悔しいっ！食べたいっ！」

笑いながらそんなことを言う水元は、ちよつと可愛らしい。

社内では責任者面してるから若手社員とは距離置いてるし、経理つてのは他の部署からは頼りにされる反面、煙たくもあるのだ。

「友達とでも行けば？」

「何人か、誘ったことはある。親子丼食べに、そっちの方まで出たくないつて断られた」

まあ、確かに水天宮は戌の日のお参りつてイメージで、わざわざ出て行く気にはならない。

「大体、最近みんな子育て真っ最中で、学生時代の友達は、遊んでくれない」

それについては同感で、俺の友人たちも頻繁には集まらなくなった。

「長谷部さんに行けば？両方とも、条件一緒じゃん」

津田がケロリと口を挟む。

こいつは裏も表も深読みもないから、発言にもまったく頓着しない。

「えーっと津田君。私の休日は暇ばかりだとでも？」

俺の休日は暇ばかりだけど、水元は何かあるんだろうか。

「あ、怒る人がいます？スミマセン！」

頭を下げる津田に、水元が膨れた顔をしてみせる。

「……悪かったよ、バツイチで。年下大歓迎だから、津田君の友達紹介して。できれば高収入で」

「そんな非人情なことはできません」

「どういう意味よ！」

休みの日に会社の人間と出歩くって発想が、そもそもなかった。

女の子たちが、買い物に行くとか旅行に行くとか騒ぐのを、不思議に聞いていた。

山口が津田の家に遊びに行ったり、津田の奥さんが野口さんと連絡を取っていたりしても、仕事の続きを家でしているような感覚でしか、見てなかった。

下田さんと出掛けたことすら、何か義務めいた感じがしていて、自分自身がどうしたいのか全然考えなかった。

「旨かったら、案内してやるよ。水元の奢りで」

他の人が普通にしていることを、してみようと思ったただけだったけど。

結果的には親子丼は、美味しいには美味しかったんだけど、俺の好みとはちよつと違った。

だけど「どうだった？」なんて嬉しそうに言う水元に、それを言うのも悪い気がして、「旨かったよ」とだけ言った。

「何？それだけ？つきあってくれないわけ？」

本気で一緒に行こうとしてたんだな、こいつ。
思わず、顔を見返す。

「お昼ご飯食べるためにだけ、ひとりで出掛けたくないんだもん。行動範囲、狭くなる一方」

なるほど納得。俺もずいぶん狭くなったもんな。

「あ、じゃあさ、神田にすっげー旨い天井がある。しかも極安」

「天井も好き！胡麻油？」

「そうそう。神保町の駅のすぐ近く」

「じゃあ、古本屋めぐりもすぐだね」

そんな風に、あっさりと約束は出来上がった。

気を張らずに済むのは、相手が水元だからだ。

約束したのが野口さんだったりしてみろ、前の晩から緊張するから。

ビジネス服以外で会ったことなんて、なかったな。

俺は普段からスーツじゃないから、違和感ないだろうけど。

あ、結構ワクワクしてるかも。

下田さんの時は気が重かったのに。

相手のペースがわかってて、自分のペースと合わせてくれることも知ってて、すっごい気楽。

ここのところ友達とも飲んでないし、休日はゴロゴロして、たまっ
た洗濯すると終わっちゃうし。

たまにはいいね、こうやって出掛けるのも。

土曜日の午前の遅い時間に待ち合わせた水元は、普通にジーンズ姿だった。

予測外に女っぽかったり肌を露出してたりしたら、相手が水元でもちよつと引けちゃうかも知れないけど、これなら全然問題ない。

社内で見るときのアイロンの当たったシャツじゃなくて、ふわふわしてるトップスが、いつもより柔らかそうに見える。

「長谷部君、意外に身体緩んでないね」

俺の腹を見下ろし、坂本が言う。

それにも気をつけなくちゃいけない年代だから、同い年の水元にも、気になるポイントなのかな。

水元と電車に乗っても気詰まりにはならないし、天井は旨かった。昼メシだけで帰るのももったいないねって、一緒に古本の街をぶらぶら歩く。

何せ影響を受けてきた文化が一緒だから、話はどこからでも繋がる。

「あ、ちよつとちよつと待って！」

一軒の古本屋を覗き込んだ水元は、何冊かの本を抱えて出てきた。

「これこれ、子供の頃、この装丁で読んだの！」

それは俺にも見覚えのある子供向けの本で、小人を見つけた少年が、大人になってから小人たちと一緒に生活する話だ。

「そんな子供向けの本、読むの？」

「児童書、好きなのよ。それに、名作に年齢は関係ないよ」

購入した袋ごとぎゅうつと抱きしめて歩く水元は、なんだか子供っぽい。

「ああ、いい日だなあ。ごはんは美味しかったし、探していたものは手に入ったし」

それからちよつと俺を見上げて、付け足した。

「若くて可愛い女の子じゃなくて、ごめんね？」

「いや、俺も充分楽しいから」

若くて可愛い女の子からは、ちよつと前に声をかけてもらった。

外から見ている分には楽しいけど、こんな風に充実しなかった。

水元相手じゃときめきや緊張はないけど、その分楽しい気分はダイレクトに入ってくる。

紙袋だと持ちにくいと、水元は布のトートバッグを買って本をそっちに移した。

肩に掛けようとしているので、それを止めて俺が持つてやる。

「それ以上肩凝ったら、具合が悪くなるぞ」

「休みの日はそんなでもないもーん。今度の派遣さん、結構動くし」
本って結構重いから、肩なんかで支えると負担になる。

「ま、いつか。誰かに荷物持ってもらうなんて、久しぶり」

水元は、にっと笑う。

「買い物に行つて、缶詰とかミネラルウォーターとか買うじゃない。
手が痺れまくり」

結婚する前、水元は親元から会社に通っていた。

離婚した後に親元に帰らなかったのは、親に申し訳なかったからだ
という。

「幸せに暮らす筈の娘が、あんな短期間で10kgも痩せて帰つて
もねー。そうしてるうちに、機会逃しちゃって」

軽く言うけど、それについてどんなに悩んだろう。

「……大変だったな」

「そうよう。離婚つてすぐ消耗するのよ。長谷部君もそんなこと
にならないようにね」

いや、結婚すらしてないけど。

「今日は楽しかった！ありがとうね」

乗換駅で元気に手を振る水元に、手を振り返す。

何をしたわけじゃないのに、俺も楽しかったなあ。

水元も同じように楽しんだなら、また一緒に出かけてもいいな。

楽しめることは、多い方が良いに決まってる。

休みの過ごし方が、ひとつ増えたじゃないか。

いつも通りの日曜日、洗濯と掃除をして、ごろりと横になる。

昨日の方が、疲れが取れた気がしたな。

考えたこともなかったけど、水元も当然今日は休みで、あいつは俺みたいにゴロゴロしてるんだろっか。

重い買い物手が辛いとか言ってたけど、自転車はないのか？

運動神経がぶっちぎれてるって話だから、乗れなかったりして……まさかね。

気がつくと前日の外出を反芻していて、自分が普段どれほど退屈しているのか、自覚した。

次はどこに誘おうかと考えてしまう程度には。

一緒に出歩く女の友達ってのを今まで持たなかっただけで、他の人は普通にやってることなんだろう。

俺に積極的に近付いてくる女は居たことがなかったし、俺は俺で慣れないものだから、どうしても緊張してしまう。

水元に近づく男が多いのか少ないのかなんて、考えたこともなかったけど、一回結婚してるんだから、確実に水元を女として見る男がいるわけだ。

そういう意味では、水元は俺にとって貴重で稀有な存在だ。

だからってわけじゃないけど、少なくとも大事に考える対象ではあ

る。

「土曜日はどうもー」

月曜の朝、かろやかに俺の目の前を通り過ぎた水元は、いつもの水元だ。

堅く考えることはないんだな。社内でも知り合っても趣味で知り合っても、友達には友達だ。

そう思えば、次も気楽に声を掛けられる。

「今度は、水元のオススメの昼メシで行こう」

次に声をかけたとき、水元はかなり驚いた顔をしていた。

夏の間に水元と3度一緒に出掛け、次はどこへ誘おうかと考えるのが楽しくなった。

昼前に待ち合わせをして夕方に別れるパターンが出来上がり、金のかかる場所に出掛けるわけじゃないし、同期同士でお互いの懐も推察できるしで、気楽なことこの上ない。

早くこんな楽しみ方、見つけとけば良かったな。

どこに行こうか何をしようかと考えるのは、ネットサーフィンするより刺激的だ。

水元の肩凝りは相変わらずで、残業のあと涙目で「肩が気持ち悪いよう」と、机に突っ伏していたりする。

前みたいに、俺に肩を差し出さなくなったけど。

肩揉んでやるくらいなんでもないんだけど、自ら肩に手を伸ばすのは、なんだかセクハラめいている気がしないでもない。

時々山口や津田と晩メシに行くと、ひょっこり現れたりする。

「水元さんって、女の人なのに仕事の話ができて、いいですよねえ」

水元の社内の立場を、津田が明確な言葉であらわした。

そうなのだ。水元の性別は、女なのだ。

「今年は泳がなかったなあ」

4度目に待ち合わせた9月のある日、水元は大きく伸びをしながら言った。

「泳げんの？」

「……浮くことはできる。いいのっ！海に行ったりプールに行ったりって気分で、夏を実感するのよっ！」

ああ、季節モノのイベントにも、ここのところ、とんと無沙汰してるな。

「子供でもいればね、子供をダシにして遊んで歩けるんだけどねえ」
水元は溜息を吐く。

俺の友達も、やれ祭りだプールだと言って出歩いている。

ご苦労さん、とか思っていたんだけど、自分の楽しみでもあるんだな、あれは。

「子供、欲しかった？」

「ああ、彼女より先に妊娠してればって思うことはあったわね。だけど、こっちに子供ができて向こうもってことになったら、修羅場だったでしょうねえ」

けらけらと笑いながら、水元は手を振った。

「これからでも、チャンスはあるだろ」

俺が言った言葉は、慰めだったのか気休めだったのか。

ただ口に出した途端に、水元がまた誰かと結婚する可能性について、リアルに考えが至った。

「お詫びに、肩でもお揉みしましょうか」

サービスの糸川が水元の肩に手を掛けたのを見たとき、あんまり良い気分ではなかった。

「いや、結構。それより、不備をなくしてくれるとありがたいね」
そう言いながら肩を逸らす水元に、ちよっとほっとしてから、疑問に思った。

俺が肩を揉んでやると言っても、水元は肩を逸らすだろうか？

これまで散々、当然のように肩を揉ませてきたのに。

そういえば、水元が肩を揉めと言わなくなったのは、いつからだろう？

少なくとも春にはそれが当然で、下田さんの不首尾のストレスで鉄板みたいになった肩に触った記憶がある。

意外に薄い肩で、パンパンに張っていると、ツボを探すことも難しくなる。

鍼に通ってるって言ったから、少しはマシになってるんだろうか。
なんで、こんなことが気になる？

一緒に出掛けるようになったら、水元の細かい表情が、見えるようになった。

会社で責任者然としているのとは別の、案外とおっとりした素顔がある。

だけど俺が怯むような人間関係は、オトコマエに笑いながら裁いていってしまう。

頭の回転が早いんだな、ケースバイケースってやつができるんだ。
こんな風にじっくりと水元を分析したこともなくて、いろいろな顔があるなあと思う。

男同士であるなら、仕事の延長で飲みにも行くし、日頃のバカ話で気心も通じる。

表面しか知らなかった人間を、知っていく過程は結構楽しい。そして、しみじみと損をしてたなあと思う。

もっと早くに、こんな風に仲良くなっておけば良かった。

水元は、どうなんだろう？

俺以外にも遊び相手が居て、それぞれとこんな風に食事したりバカ話をしたりしてるんだろうか。

その中には、水元を女と認識している男がいるのかも知れない。

何かの拍子にそれが表に出て、水元自身がそう思われることを不快に思わなければ。

…… あ、やばい。

水元は、また結婚する気はあると言っていたのだ。

恋愛を拒否するつもりなんて、ないだろう。

何がやばいんだか、よくわかんないけど。

「あー、今週はちよつと予定アリ」

5回目に誘った時、水元はあっさりとそう言った。

それに対してショックだったのが自分でも意外で、驚く。

なんとなく水元も、俺と同じように次にどこに行こうか楽しみにしてくれてる気がして、本当は自分だけが楽しんでるのかな、なんてだとしたら、下田さんと同じじゃないか。

下田さんだって、俺が楽しんでも思ってたかも知れないじゃないか。

なんだか俺、浮かれてたのかも知れない。

喋りやすく、誰から見ても女で（俺は忘れてたけど）、一緒に外出しても違和感のない水元が、俺と一緒に楽しそうに見えるからだけど、それが水元の「ケースバイケース」ってヤツで、俺に合わせてくれるだけだったとしたら、俺だけが阿呆じゃないか。

それにしても、何の用事なんだろう。

見合い、とか？うわ、それも可能性はあるのか。

俺だって、実家から何回か言われたことはあるぞ。具体的な話にはならなかったけど。

……困る、のか？水元が決まった相手と会ったり、見合いしたりすると、困るのか俺は？

友達ならば、祝福してやって然るべきじゃないのか。

最初に結婚した時、祝儀持って結婚式に出たじゃないか。

二次会の幹事まで引き受けて、シャンパンタワー仕組んだりしてさ。

あの時は別に、困らなかったぞ。

まあ、今みたいに一緒に遊んだりはしてなかったけど。

なんだか考えるのが面倒だ。

大体、何の予定かなんて聞いてどうする。

その時はその時、ケースバイケースだ。

女とでも友達付き合いできると学習しただけで、良しとしなくてはこれからでも、そんな相手ができるかも知れない、その練習だ。

今更それを学習しても、使えるかどうかかわかんないけど。

その週の週末、溜まった洗濯物を干しながら考えていたのは、そんなことだった。

「妹がねー、二人目出産で、家中ばたばたなのよ。不肖の姉、助っ人ー」

その言葉にほつとしながら、なんだかなあと考える。

本当なら、自分もそんな時期だもんな。

水元は女だから、もっと強くそう思っているかも知れず、そうすると俺と遊んだりするのは、生産性にもとる行為じゃないか？
いや、暇つぶし程度か。

「でも、今週は平気。どこか遊びに行きたい場所があったの？」

うつ、と詰まった。ないんだ、そんな場所は。

水元と遊びに行きたかっただけ。

詰まった俺の顔を見ていた水元が、笑った気がした。

「私ね、今、bunkamuraに来てる絵が見たいんだけど」

「おお、それ。じゃ、今週行こうか」

そうして約束して、普通に仕事する。

なんだかワクワクしてしまい、自分の脳味噌に「この浮つきようはなんだ」と問い合わせたくなる。

残業帰りにまた水元が自分の肩を揉み解していたので、声をかけた。

「揉んでやろうか？」

すぐに手が右左に振られ、苦笑いが戻る。

「大丈夫大丈夫。前ほどひどくないから」

「じゃ、お先にー」

經理のブースを出たら、ひとりごとめいた呟きが聞こえた。

「とうにはへんなきがはえている」

戻って聞き返すのもおかしい感じだし、俺に聞かせるつもりなら、

多分呼び止めただろう。

書類読み上げたのかも知れないし。

週末を潰させて申し訳ないような気分と、それを上回る高揚感。どうも俺は、水元と一緒に週末を過ごしたいらしい。

水元も楽しんでくれていると、いいなあ。

そして、もっとお互いの気心が知れば。

……知れば、どうなるんだ？

間抜けなことに、その時にやつと気がついたのだ。

水元とどうにかなりたいたいなんて思ってたから、自分で気がつかなかった。

もっと水元と深く知り合って、できれば毎週予約で埋めてしまいたいくらい、プライベートで会いたがってる。

俺って、自分への反応も、すっごく鈍い。

本気で自分を阿呆だと思ったのは、久しぶりだった。

女の子ってのは取っつき難い存在で、そこをどうにかこうにかクリアしなければ、近寄れないもんだと思ってた。

だから唯一緊張しない女である水元は、恋愛対象から外れてる筈だ。にもかかわらず、俺は水元と一緒にいるのが楽しいし、プライベートでもっと親しくなりたいと思ってる。

今ですら仕事の人間関係より、ずいぶん近くなっているのに。

bunkamuraで目的の絵を見た後、水元が言う。

「このまま原宿まで歩いてお茶しない？好きなカフェがあるの」

カフェねえ。女の子って店の雰囲気はどうの、カップがどうのって調べるの、好きだよな。

水元の歩調に合わせて、ぶらぶらと歩く。

「俺さ、この辺の道、不案内なんだよね。どこ歩ってるのか、ぜんぜんわかんねえ」

「私は学生の頃、散々ウロウロしてたから」

その後、学生の頃何をしたかという話になって、同年代だと微妙にクロスしていて面白い。

「男子校から工学部だったからな。サークルも入ってなかったし、バイトは実入りの良いガテン系だった。今考えると、しみじみと寂しい青春だなあ」

「長谷部君らしいー」

「それ、褒めてないから」

にこにこしている水元が、方向を指差す。

「そこの通りの奥。ちょっと小道になってるから、穴場なの」

向かい合わせに落ち着いて、ビールのレモンジュース割なんか飲んでる。

ちよつとだけ冷たい風が吹いていて、半分デツキに出ているような席だと、冷え性の水元は肩が冷えるんじゃないかと気になった。

「席、交換しない？こつちの方が風があたらない」

照れくさそうな顔をした水元と、席を交換した。

「長谷部君って、ちゃんとそうやって気を遣える人なんだよね」

確認するみたいに、俺の顔を覗き込む。

その顔が、妙に可愛く見えた。

いつも通り夕方になって、帰ろうと電車に乗る。
乗換駅で別れようとして、帰り時間が惜しくなった。

「晩メシ、食ってかない？」

水元は不思議な顔で笑った。

「やっつと、誘ってくれた」

やっつと……？えーと、それって。

頭を一生懸命使っている間に、水元が歩き出す。

「とうにはへんなきがはえている」

歌うように呟いた言葉には、聞き覚えがある。

「それ、何か意味がある言葉？」

「わかんないのなら、いい」

わかんないから、聞いたんだろ。

普通に居酒屋に入って、ぼんやりと水元の顔を見る。

今日は綿のセーターにジーンズ、カジュアルな分若々しく見えて、
やっぱり会社で会ったのと違う。

「悪いな、晩メシまでつき合わせちゃって」

「あのねえ。休みの日にまで、気が向かない相手と出掛けると思う
？」

水元は頬を膨らませて、子供っぽい顔をした。

「長谷部君って、自分のこと過小評価してない？下田さんにだって、
向こうから誘われたんでしょ」

だってあれは、何かの勘違いで。

「ほら、そうやってびっくりした顔する。甲斐のない男ね、まった
く」

ふう、と溜息をついた水元が何を怒っているのかわからない。

「黙られちゃうと、何言っているのか悩むのよね」

そう言った後、水元はふつと笑う。

「ま、いいや。長谷部君が長谷部君だって証拠みたいなもんだね」
それからはいつもの話になって、水元は機嫌良く皿をつつく。

気が回るのもいつもと一緒に、俺のジョッキが空く前に、追加のオーダーをしたりする。

楽だな、水元と一緒にいると。

水元も楽だと思ってくれてるといいな。

「水元って、俺と一緒に出かけたりメシ食ったりして、楽しい？」
聞いてしまったのは、肯定して欲しいからだと思う。

俺は、すごく楽しいんだって言いたい。

「ばか」

戻ってきた言葉が意外で、思わず顔を見返した。

「私、一回だって不機嫌な顔した？してないよね、楽しんでるんだから。そんなこともわかんないの？」

言葉が喧嘩腰で、うろたえる。

俺は何か、気に触ることを言っただろうか。

「なんか、怒ってる？」

おそろおそろ聞いてみる。

「すかたん」

「へ？」

「あんぽんたん」

「なんで？」

「もういいっ！」

水元はぷいっと横を向く。

素面だよな、大して飲めないんだから。

黙ってしまった水元を、どうしていいもんだか持て余して、俺も黙って梅割を飲んでいた。

「長谷部君って本当に……」

水元が急に笑い出したので、機嫌が直ったのかと一息ついたら、次の言葉でふいを突かれた。

「鈍いにも程がある」

「何が？」

思わず声が大きくなる。

「とうにはへんなきがはえている」

「何だよ、それ」

「唐変木って言ったのよ、すかたん」

唐変木って、すかたんって、俺？

「ここどころ、ずっと態度に出してたつもりなんだけどなあ。そんなに私の態度って、気にならないかなあ」

水元は頬杖をついて俺を見る。

「それって、あの」

意味がやつと頭に届いた。

「ずいぶん遠慮してたんだよ、私。バツイチだし、トシもトシだし」
ええっと、それってその、俺が受取りたいように受取っていい言葉
なんだろうか。

「鳩が豆鉄砲食らったみたいになって表現、あながち間違ってるね」
頼杖をついたままの水元が、表情を崩さずに続ける。

「すつごく照れくさいんだけど。何か言ってくれないかなあ」
何か言えって言われたってね、何を言えればいいって言うんだ。

俺は、口下手だ。ツラも女ウケしない。

だからまさか、普段の俺をそう思ってくれる人がいるなんて、想像
もしていなかったのだ。

確認の言葉が出そうなのを、慌てて飲み込む。

水元は膨れた顔でメニューを開いて、オーダーを聞きに来た店員に、
俺が飲まないワインを頼んだ。

「酔ったら、長谷部君の責任で送ってってよ」

水元のリミットは、確か中ジョッキ三分の二だった。

宣言通り酔った水元を送って、初めての駅に降りた。

家まで送ってからどうすればいいのか、なんて下世話な妄想をして、そうじゃないだろうと自分にツツコミを入れる。

土曜日の十時過ぎは、住宅街を歩く人は少ない。

「酔った勢いだから、言っちゃうよお」

妙に舌足らずで、酔った顔は真っ赤で、会社にいるオトコマエの水元とは別人だ。

「長谷部君って、ぜんっぜんわかってない。私が何を迷ってたんだかも、わかんないでしょ」

「水元って、前から……」

俺のこと好きなのかって聞くのはおかしいし、興味があつたのかつても、違う気がする。

「好きでもない男に、肩なんて触らせるか」

聞こえたんじゃないかってタイミングで、水元が言う。

「下田さん、辞める時に私になんて言つたと思う？ 長谷部さんは水元さんのこと、女として見てないって言ってます、残念でしたー、だって」

くそお、と小さい声で呟くのは、いささか水元らしくない。

つてか、女って怖い。思い込みだけでそんなこと言っちゃうのか。

「どうせバツイチだよ。若くもないし可愛くもないよ」

いきなり俺の肩に拳が降ってきた。

「だから、黙って好きでいる予定だったのにっ！」

続いて降ってくる拳を、思わずよけた。

「一回だけ記念にデートしちゃお、なんて思ったら、続けて誘ってくれるんだもん！ 期待しちゃうじゃない、この唐変木がっ！」

おいおいおいっ！ここで暴れるなっ！ってか、なんかすごく予測外の展開に……
もう一度振り上げられた拳を掴む。

酔って焦点の合わない目が、俺を懸命に見ていた。

「ばか。いいよ、慰めてくれなくて」
慰めてるんじゃないかって、ええっと。

「俺が言いたいこと、水元が言っちゃったんじゃないか」
急展開に、頭がついていかない。

「唐変木で、悪い。俺が気がついたのは、つい何日前だ」
「何によ！」

「水元ともっと一緒にいたいってこと」
水元の目が大きく開き、拳から力が抜けた。

「……嘘」

調子がいいことを言えるほど器用じゃないことは、水元も知っているだろう。

「嘘じゃないよ」

酔っ払いの目が、みるみる潤んだ。

「だって私、バツイチだしっ！」

「知ってる」

「若くないし！可愛くないし！」

「それ、さっきも聞いたから」

「長谷部君は優しいから、イヤだと思ってもなかなか言えないと思っつてっ！」

「俺もそう思ってた。水元に迷惑じゃないかって」

住宅街の静かな道で、水元は困った顔で俺に拳を掴まれていた。

「急にそんな風に言われたって……」

いや、急に言われたのは俺も同じだから。

変なところで似た物同士らしいな、俺ら。

頭の回転が早くて気の回る水元は、意外なところでおっとりしている。

「うわあん、もったいないっ！」

水元は急にしゃがみこんだ。

「こんな大事なことを聞くのに、私、酔ってるうっ！長谷部君は二度とこんなこと言ってくれないっ！」

大学生らしき若い男が道を歩いてきて、俺たちをまじまじと見ながら通り過ぎて行った。

慌てて、水元を立ち上がらせる。

「言つつ！素面の時に言うから、立て！」

「嘘だね。長谷部君みたいなあんぽんたんは、そんなことしてくれないね」

ガキみたいになった水元の指示通りの道順で送った。

駅から十二・三分つてとこなんだろうけど、歩くのに三十分以上かけた気がする。

「ここ、私が住んでるとこ」

小さなワンルームマンションっぽい建物を、水元は見上げた。

えーっと。どうしたらいいのかな、こんな微妙な時。

「素面の時に仕切りなおすー。すかたんの長谷部君、おやすみー」

今一つ呂律の怪しい水元が、オートロックを開錠してロビーに消えていった。

帰りの電車に揺られながら、何がどうなってるのか整理しようと思
った。

にもかかわらず、俺の頭の中には水元の「すかたん」が繰り返して
いるのである。

しかも気を抜くと頬が緩むってオマケつきだ。

なんだってんだ、三十代も半ばになってるってのに。

しかもこの歳になれば、そんな話ははじめっから「結婚前提」なの
である。

水元と結婚、ねえ。

想像もつかないな……って、気が早い。

要するに、浮かれているのだ。

「長谷部、なんだか調子良さそうだな」

「そうっすか？」

月曜日の朝、生田さんに声をかけられて、思わず顔を撫でる。

「色艶いいぞ、女でもできたか？」

これは普段の生田さんの挨拶で、眠り足りた月曜日なんかの常套文
句なのだ。

「そうだ、早いとこ仲人やらせろ」

部長が一緒に突っ込んでくる。

三十代半ばで独身ってのは他にもいるんだけど、何故か俺にはこう
いう話題を振りやすいらしい。

それを横目で見ながら、水元が普通の顔で通り過ぎる。

上手いもんだな、と思う。

それとも俺が、意識しすぎか。

安全靴の靴紐を締め上げていたら、山口がロッカールームに入って

きた。

「現場ですか？」

「おう。涼しくなったから、外が気持ちいいよ」

別に話があるわけじゃなくて、山口はロッカーから黒いネクタイと喪章を出したただけだ。

「木島設計さん、葬式なんですよ。手伝い頼まれちゃって」

「あそこ、所長だけじゃなかったか？」

「そうそう、サカグチ・アーキテクツが仕切ってます」

営業だと、そんなことも仕事のうちだ。
しみじみと俺には向いてない。

「長谷部君、肩揉んでえ」

水元のその言葉は、やけに久しぶりだ。

夕方の給湯室、定時を過ぎて派遣社員たちが華やかに帰っていく。

「前より幾分マシか？それにしてもひでえな、老眼じゃないのか」
首の付け根をつまんで、細いと思う。

「痛いよう……私が老眼なら、長谷部君も可能性あるじゃない」

「ご尤も。なんせ同い年だ。」

「また長谷部さんに肩揉ませてるんですか？本当に仲良いですね」
入ってきた萩原が、自分のカップをすすぐ。

「坂本さん、元気？」

俺の手を離させた水元が笑う。

「これから会いますよ、来ます？」

堂々と自分の女だって主張できるのって、いいよなあ。
なんか俺、すごく微妙なんだけど。

「今週の日曜……」

「あ、ごめん。妹の子供と動物園に行かないと。土曜は？」

「現場だけど」

どうも、間が悪い。

かといって、平日と一緒に会社から出て行くってのも、どうかなって感じた。

俺と水元が一緒にいたところで、不思議に思う人もいないと思うけど。

相当酔っていた水元が、記憶しているかどうか知らないけど、素面の時に仕切りなおすのであれば、その場は会社から離れていたい。同じ場所から出発して、途中で待ち合わせるってのも、殊更に秘密めかしてる気がして、気乗りしない。

なんだかなあと過ごした日曜日、煮えきれない気分の夕方に水元からメールが来た。

「池袋まで出て来れる？」

こっちはひとりでメシ食って寝るだけだから、ほいほいと出て行く。なんかさ、これから待ち合わせる相手がいるってだけで、浮かれちゃうもんだね。

良い香りの石鹸ショップで商品を物色している水元を、店の外から見ている。

ちらつと見えた値段にびっくりして、そういえば、前につきあった女の子の化粧品の金額に驚いたことがあったなと思う。

「やだ。来てたんなら、声をかけてくれればいいのに」

振り向いた水元が、商品を手に笑う。

「この香り、好き？」

鼻先に突きつけられたのは、強い花の香りだ。

「いや、嫌いじゃないけどさ。ちよつと強い」

「このまま身につけるんじゃないもの。洗い流したあとに、肌に残るのよ」

これがまた、微妙にエロチックなセリフだ。

その香りが好きかと聞いた後、肌に残ると言う。

会計をしてもらっている水元は、何事もない顔をしている。俺が深読みしてるのか？

「お待たせ。ごはん、何食べようか」

隣に立った水元は、ものつすごくナチュラルな表情だった。

子供相手に歩き疲れたと水元が言い、すぐに座れる場所を探した。

「疲れてんなら、無理しなくても」

「やだ。忘れたフリされるから」

忘れたフリ……仕切りなおしてヤツか？覚えてんなら、何も仕切りなおさなくても。

「今日は素面だもん。幻聴じゃないって納得できる」

「……俺、ちよつと飲みたいかも」

少なくとも、デパート内の明るいレストランで言いたくはない。

「いいよ、帰るまでで」

にへつと笑った水元が、照れくさそうに頷く。

こんなに子供っぽい顔してたかな、水元って。

俺が知ってる水元は、気が回って頭の回転が早くて、責任感の強い女だ。

頼りになるけど可愛くないって話は、聞いたことがある。

可愛くないなんて、とんでもない。

これは「欲目」なんだろうか？

翌日仕事だから、あんまり遅くなる気はない。

九時過ぎには送っていこうと立ち上がる。

「忘れてないでしょうねえ」

くそ、そっちこそ忘れる。照れくさくていけない。

大体、さつきから可愛くてしょうがない。

会社でそんな風に思ったことなんて、ないんだけどな。

地下鉄で水元の住む駅まで行って、一緒に歩き出す。
道の半ばまで歩いたら、水元は立ち止まった。

「仕切りなおし」

「うん」

先週みたいにイキオイがついてないから、言い難いったらない。うう、と口籠もったまま、言葉に詰まる。

俺の顔を見る水元の目が光って、綺麗だ。

視線に吸い寄せられて、思わず顔を近づけた。

ぶぶつと吹き出した笑いに面食らったのは、その後。

「ごめつ……ごめんっ……なんか照れちゃってっ……」

身体を折り曲げて笑い出した水元が、途切れ途切れに言う。

途端にこっちも恥ずかしくなって、一緒に笑い出してしまふ。

ムードも仕切りなおしも、ありやしない。

今までただの同僚で、今日から恋人なんて変化は、なかなか難しい。

水元のワンルームマンションの前まで送って、結局仕切りなおしも進展もなく別れる。

それでも何か、ほっこりとしたものが胸の奥にある。

約束はしなくても、水元との時間がこれからゆっくりと流れる予感がある。

次は、一緒に何をしようか。

次は、どんな顔を見られるんだろう。

触りたいとかキスしたいとか、そんなことよりも先に、水元ともっと近寄りたい。

お金を出せば相手してくれるおねーちゃんは居るけど、水元に望むのは、もっと別のことだ。

何年前前につきあってた女の子は、まず結婚の話が先立った。

俺より結婚に興味があったんだっているのは、今になって理解できる。

下田さんは、自分のフィルタを通してしか、俺を見てなかった。

水元は何年も掛けて俺を知っていて、情けないとことか口下手なことか全部知っていて、それでも好きだといってくれた。

水元が辛い顔をしていた時も、仕事で走り回っていたときも、俺は何かしてやったわけじゃないのに。

何かしてやりたい、と思った。

俺は不器用だし、うまいことなんて言ってやれないし、連れて歩いて自慢って彼氏にもなれない。

でも水元が本当に、このままの俺を気に入ってくれてるんだとしたら、何か返したい。

俺を気に入ってくれたってだけで、何か大切なものを貰った気がする

る。

だから何でもいいから水元に、それ以上のことをしてやりたい。こんなことを考える自分が、すごく青臭く思える。

いいじゃないか、経験値は低いんだから。

自分の部屋に帰って、壁のスイッチをぽつんと押す。

白っぽい蛍光灯の灯りに照らされた部屋は、味気ない。

一応の掃除はしているし、ひとりの時間を過ごすために、何不自由なく揃った部屋なんだけど、何か足りない。

夕方からの時間が充実したから、気がついたことがある。

仕事以外の人間関係で、会話を楽しんでいるのなんて、本当に久しぶりなんだ。

それが水元であることが、とても嬉しい。

仕事帰りにちよつと一杯、なんて席に水元が現れたのは、ほんの偶然だった。

何人かで飲んでいる中に山口が居て、会社に残っている野口さんと呼んただけだ。

野口さんは野口さんで、水元と夕食の相談をしていたって話。同じ会社から出て同じ場所に帰る山口と野口さんは、帰宅経路がけっこうバラバラらしい。

野口さんも水元も結構な中堅で、男の間に座っても違和感が薄いから、呼ぶのに異論のあるヤツはいない。わいわいと飲んで、営業先が煮詰まってる津田に山口がアドバイスする、いつもの風景。

一足早く帰った津田に続いて、そろそろ居酒屋を出る。

俺と同じ方面なのが水元だけ、これも本当に偶然だ。

一緒に地下鉄の入口に入って、並んで歩く。

「今週も後半戦だねえ」

俺を見上げた水元が、さっきよりも少しだけ親しげに言う。

その顔が、なんていうか、可愛いわけだ。

急激に自分の水元を見る目が、変化していくのを理解する。

もう、こうなると意思なんて関係ない。

可愛いもんは可愛い、そう思っちゃうのだ。

「やだ、なんでこっち見てるのよ」

言われて初めて、俺が水元を見続けていたことを知った。

「あまりの美しさに、見惚れた？」

「いや、そういうわけじゃなくて」

やけに慌てて否定して、水元の唇が尖るのを見た。

柔らかそうな唇……いや、それをここで連想するな。

電車のつり革を掴む手が、思いの外小さい。

今まで、ひとりで頑張ってきたんだよな。

これから俺が、少しでも支えてやればいいけど。

「あのだ、池袋でお茶でも飲まない？」

こんな時間なんて、ファーストフード店くらいしかないけど、まだ一緒にいたい。

「遅いから、今日は止めとく」

返事にがっかりしたら、つり革から俺の腕に、水元は掴み先を代えた。

「そんな顔してくれるの、嬉しいな」

「週末が毎週楽しみなのって、いいな」

「うん」

これだけの会話で、俺と水元の立場が確定する。

乗換駅に到着するひとつ前、バッグを持つ水元の手を、上から握った。

暖かくて照れくさくて、進展とも言えない進展だけど、俺と水元は今、同じ方向を向いている。

たまには目的地を持たずにウロウロしようかと、新宿御苑に行ってみたりする。

ただっ広い芝生ばかりが記憶にあったけど、整った様式の庭園は、結構見ごたえがある。

「風が秋の気配だね」

水元が伸びをして、俺の顔を見ながら笑う。

十月のはじめ、そろそろ強い日差しではなくなってる。

「あのさ、手、繋いでいい？」

黙って手を繋いじゃうほど、慣れてないのが情けない。

「そういうとこ、いちいち許可を求めない！」

返事と同時に、俺の掌の中に水元の手が飛び込んできた。

「こっちだって、なんて返事していいのか、困るじゃない」

「唐変木のおんぼんたん、だからな」

面白そうに笑いながら、水元が手を揺らす。

中学生や高校生の頃にこんな経験はないから、神経が手に集中してしまう。

女の子とつきあった経験はないわけじゃないし、遊んでたとは言えないけど、まあ一通りのことは……

うう、今までは、はじめっから「つきあう」と決めてつきあってたんだから、勝手が違う。

フランス式庭園の中は、秋のバラが綺麗だ。（バラとチューリップ以外、花の名前はよくわからない）

水元はいちいち花の名前を確認して歩く。

「優雅な花って、名前も優雅で楽しいよね」

俺はバラの名前になんて興味ないけど、にこにこしてる水元の表情

は、見飽きない。

唇、柔らかそうだな。

そう思ったら、視線が離れなくなった。

今度は笑うなよ、こっちはマジなんだから。

ふっと目を閉じた水元が、心持ち顎を持ち上げる。

触れたか触れないかのかすかな感触で、顔を離した。

そのまま目を開けた水元が、微笑む。

半信半疑だったのはじまりが、リアルな実感として押し寄せてきた。

水元が好きで可愛くて、大事にしたいし大事にされたい。

繋ぎなおした手は、暖かい。

「帰っちゃうの、もったいないな」

夕食が済んで送っていく電車の中、水元が言う。

それは、ええっと、何か違う意味にとっていいんだろつか。
慌ててる俺とはうらはらに、水元はごくごく普通。

「明日も会おうか」

あ、そういう意味ね、とちよつと安堵して、結構がっかり。

俺だって男だからさ、そういうところは期待してるし、お互い大人だから、それは当然といえは当然だろ。

ただ、間合いが計り難いんだな、つきあいが長すぎて。

住宅街の真ん中で、繋いでいた手に力を入れた。

「どうしたの？」

水元が俺を振り仰ぐ。

上手い言葉が見つからなくて、水元の顔を見下ろした。

しつかり者で、何でも自分で解決しちゃう水元に、俺は何ができるんだろっ。

「長谷部君？」

瞬間、自分でも見えない感情に促されて、逆側の手で水元の肩を抱いた。

「ちよつ、ちよつとっ！どうしたのっ！」

慌てた水元が逃げようとするので、つい、両手を回した。

ああ、住宅街の真ん中の体勢じゃないかと、自分の中の自分がツッコミを入れる。

でも、一言だけ言いたい。

これだけは、今言いたい。

「ありがとうな」

「へ？」

ジタバタと水元が動く。

「俺なんか気に入ってくれて、ありがとう」

急に力の抜けた水元を、まだ離したくはない。

ただど場所が場所だし、ほら、また通行人。

「ばか」

ぎゅっと深く組まれる腕。

これって下田さんもよくやった行動だけど、人によって嬉しさが違い過ぎ。

下田さんみたいに胸の感触がリアルじゃないけど、水元のほうが百倍嬉しい。

水元の家まで送る、その時間も名残惜しい。

あっけなく到着しちゃったワンルームマンションの前。

「送ってくれて、ありがと。明日、気が向いたら電話して」

「水元が気が向かなかつたりして」

軽く返した言葉の返事に、ちよつと箍が外れた。

「長谷部君が電話してくれるの期待して、一日中待つてるもん」

子供じみた言葉なのに、何かのスイッチだったらしい。

街灯とマンションの煌々とした灯りが漏れてくる場所で、水元にキスした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2394y/>

行灯の昼

2012年1月13日21時51分発行